１９２５年（大正14年）〔21歳〕
「辰雄日誌１９２５」No. 7　（3）
――１９２５年８月１～31日――

小池辰雄

○１９２５年８月１日（土）

曇、晴、雨。7月が去った。20日の休日が過ぎた。その間、憶ゆべきことが一つある。それは藤井先生のお祈りである。僕のために、静かに祈って下さった藤井先生のお祈りである。これは宝である。生命である。僕は之を忘れ得ない。僕は起つ。これだけである。僕は闘う。これだけである。

午前6時半起床。7時出発。7時45分東京駅着。8時25分発車、小田原へ先ず行く。それは佐藤六郎様御見舞のため。六ちゃんは肺の不快で（肺病ではない）半年ほど小田原に来て居られる。六ちゃん、昔の六ちゃんではなくて、やや神経過敏なのに驚いた。半年の病気では、ことにこの程の病気では神経衰弱的にならざるを得ないことであろうと同情した。僕も苦く体験したところであったから。六ちゃんの心情がよく解る。六ちゃんは長者、之に対して教訓的に解くことは不可能のこと。僕の体験を暗に示して激励した。元気をつけてあげた。その間のこともかなり御承知である。しかしその実行、これが問題である。それは道義が解ったたけでは駄目なのである。教訓では駄目である。それは生ける力の能くことを要す。それは宗教によりてのみ救わる。宗教はかかる場合にことにその必要なるを感ず。もう六郎様のことをかれ之れ云うに及ばない。人は順風に帆を上げているときは、いかにも勇気があり、思慮があり、人格者らしく見える。安全である如く見える。しかし一度、逆風、暴風に遭遇するや、多くこれに挫けるものである。そこに宗教の在るか無きかを明らかに知る。勿論、順風に於ても、宗教のある人とない人とを知り得るが、逆風にありて初めてその保つと亡ぶとを知る。逆風にあいて亡びんとして、宗教によりて救わるるの人あり。しかして、宗教に入るの人あり。また、幸に救われてもやはり宗教に入らざる人あり。かかる人は禍なる哉。しかして、此くの如き類多きを如何せん。

六郎様の願わくはこれを機として宗教に入らんことを祈る。切に祈る。あの絶倫の精力、勤勉、人格に宗教心の根の据えらるるあらんか、それは如何に光るものとならんと思う。神よ、この願を受け入れ給わんことを。ああ苦しき、難き願いなるが如し。しかれども、神よ、願わくは、彼をいつか真に救い給え。アーメン。

午後2時7分、小田原発――僕は小田原は生まれて初めて――国府津乗換、午後5時頃沼津着。沼津！　懐かしき慕わしき名よ。汝は我が愛する兄をその死出の旅路に最後に慰めし日本の地なり。我は涙ぐめり。我が思い切なり。時に天曇りて全地を潤す。

１９２５年８月１日、汝に迎えられて私は感謝す。汝との会見に互いに泣涕（きゅうてい）す。握手す。而も、我は泣かんために来れるにあらず。そは、光と力とに満ちて凱歌を挙げて還（かえ）らんがため。さらば汝、我がために雄々しく泣き、雄々しく怒り、雄々しく笑え。

沼津市桃郷、杉山彦作氏別館に入る。入浴。寝床せんとするに当り書す。こからバイブルとヒルティーを読む。兄上と共に二階の一室に。東京の母上のために祈る。

……〔独文省略〕……。

○1925年8月2日（日）

晴。昨夜、大雷雨。起床6時。海岸へ行く。祈る。富士を望む。午前は安息日の午前なる故に聖く守る。コリント前書5章、6章、7章。午後、水泳。今年最初の泳ぎ。水温高く、波静か。興つきず。夜、明月。海岸に出る。汀の銀波、遠くの漁火、涼風颯々（さっ）。聖なる美、天然よ、我が家よ。

今日は高島の伯母様の「佳き日」、涙の中に深き歓び、待望あり。高島の嘉代子様に御手紙を差し上げる。その他、数葉の葉書。感想多くあるが一寸略す。

長兄の日誌、１９１９年1月1日～2月8日までのを読み始む。「第1巻」とある。

今日は、書簡に忙しくあった。否、真剣であった。

Toiling,— rejoicing,— sorrowing,
Onward through life he goes;
Each morning sees some task begin,
Each evening sees it close
Something attempted, something done,
Has earned a night's repose.

〔註：「村の鍛治屋」（The Village Blacksmith）ロングフェロー（1839年作）。著作集第8巻『詩歌集』より、小池訳〕

労（はたら）きながら――歓びながら――悲しみながら
彼は人生を前（すす）みゆく。
晨（あさ）ごとに何ごとか始められ、
夕にはその終るのを見る。
何ごとか企てられ、何ごとか果されて
一夜の眠りを彼は贏（か）ち得（え）る。

「ただ御言を聞くのみならず、之を行うものとなれ」（ヤコブ1・22）

○1925年8月3日（月）

晴半。午前5時50分起床。朝食前に少しやる。10時、午前の水泳。泳ぐこと半哩（マイル）〔約804m〕、さほど疲れぬ。勿論抜手。自分の心臓の強い身体を得て本当に有難くあった。これでこそ、難事に耐え得る。やっぱり身体も大切と思った。昼食、美味し。休息1時間、午睡。午後は小雨あり。休泳。読書。サドウ・サンダル・シングを読んで3回、涙に眼がうるおった。彼は我が力の友である。幸なる哉。彼の如き偉人を知り得た今日の僕。これを紹介して下さった著者、佐藤繁彦先生に謝す。先生のルッター研究8月号を待つ。入浴、夕食。

兄と睦（むつ）まじき日を送る。ああ、楽しき僅かの貴き日々よ。朝に東にのぼる日を迎え、夕に西海に没し行く夕陽を送る。我が胸はあふる。貴き一日。夕方、月が出づれば泳がんものをと二人ではかりしに、かなわず残念であった。明日の晴天ならんことを祈る。兄上は10日に帰られる。願わくは、晴れたる日の迎えられんことを。

数葉の絵葉書を書く。まだ書くべきところあり。夜10時20分将に寝んとす。宿の総ての人は寝しずまりたり。彼等のよき道を歩まんことを。我、二階の中央の6畳にて大声に叫ばんか、

「汝等、キリストを信ぜよ、十字架を仰げよ」

と。叫ぶは、ものぐるほしくあるだろう。ただ身に行わんのみ。我は身を以て福音の証をなさんことを願う。しからば叫ぶの日も近からん。神よ、願わくはこのことのために我を用い給え。アーメン

昼間、両どなりのやかましいのは困ったことだ。旅館だから止むを得ない。かかるところで勉強をしなければならないのも一つの試練である。有難く受くべきである。

O! Pilgrim's Progress!　Ther's Every day of mine!

〔おお、巡礼者の前進よ！　ここに私の毎日がある！〕

○1925年8月4日（火）

晴、満月、月食。午前6時半起床。午前10時まで独乙語。この頃はかの方途によって事をなす。聖書、独乙語、英語、宗教書類、書簡、日記、旧約聖書の順にて。10時より12時まで水泳。写真をとる、牛臥山（うしぶせやま）と海を。午後2時より水泳、4時半まで。学習院の水泳大会、ちょっとのぞく。小堀流、とびこみなし、御前泳ぎあり。写真をとる、僕を、兄を。よく泳いだ。陸にあがること殆どなし。水につかりきり。一つには水温が高いからである。抜手、約1哩（マイル）〔1609m〕なす。夜、二度海辺を散歩す。泳ぐことはやめた。満月が月食とは珍しい。漁火、村々の灯火、海に映じてその詩的情景の美、言わん方なし。汀に油火赤々と照らして漁夫が裸体にて網をくるの景は正に一幅の名画。天然の手になるこの素朴なSee-man's Life〔漁夫の人生〕を誰か描き得るものぞ。ああ我、詩人ならば、一詩を詠むべきを、悲しい哉。ホイットマンよ、来りて我が心に宿りて助けよ、と言った。自分は一方かく思うとともに。

Longfellow〔ロングフェロー〕の例のToiling……〔労(はたら)きながら……〕の一節を思い出して無限の感に打たれ、鍛冶屋を讃えたあの心を以て、眼前の漁夫を讃えた。そして自分も、かくの如き健全なLife〔人生〕をと祈った。

第2回目の散歩は実に感謝すべきものであった。帰宿10時、ダンテの『新生』を読んでこれから寝る。10時40分、これからOld Test.〔旧約聖書〕を。

○1925年8月5日（水）

晴、驟雨。起床7時、就床10時。水温25度、雨中水泳、陸にあがることなし。水に強くなったことに我ながら驚く。第五女学校の生徒、2週間の海辺生活を終えて帰る。学習院もそろそろ。一中もそろそろだろう。海が淋しくなる。また可なる哉。僕は人気(ひとけ)が好きでない。と云って、隠者ではない。所謂賑やか、おまつりさわぎ、という奴がきらいなのである。俗ッポイコトが大きらいだ。僕の嗜好はたしかにちがう。先ず、人の殆ど全く問題としない、天の星が僕の賑やかな友である。人と共に、色々な遊びや話しやさわぎをすることは僕に賑やかでない。淋しいことが屡々(しばしば)ある。この頃、“A Field Book of The Stars” by William Tyler Olcott〔「星のフィールドブック」ウイリアム・タイラー・オルコット著〕で、Constellations〔星座〕の研究を始めた。The Constellations of Summer〔夏の星座〕から始める。Cygnusの61〔はくちょう座61番星〕を昔、兄上から聞いてはっきりしなかったのが、よくわかり、且つ昨夜これを例のOpera-glass〔望遠鏡〕で観た。10.4 years以前の光をながめているのだと思ったとき、何だか不思議な様な、変な気がした。今から10.4年前、未だ僕が小学校の6年生のときだ。

出すべきところへは先ず一通り、Letters〔手紙〕を書き終った。

午前に午後に泳ぐ。水泳は実にいい運動である。これに勝るものはない。御飯が東京の倍食べられる。糖分を要求する。羊羹半本が楽々である。水分を要求する。西瓜の4分の1が丁度いい。

『ルッター研究』（8月号）が来た。感謝!!　我が友よ。感謝なる哉、キリスト・イエス様よ。偉大なる哉、バイブルよ。ああこの外に言うべきことなし。海を友とし、聖書を友とす。これに勝るこの世の快楽なし。

訪欧飛行、チタ安着を聞く。彼等4勇士の成功を祈る。これ日本国のためなればなり。

〔註：朝日新聞社により、国家的事業として敢行された初風(はつかぜ)、東風(こちかぜ)2機、飛行士4名による訪欧大飛行。1925/7/25～10/27までの95日間、東京～ピョンヤン～ハルピン～モスクワ～パリ～ロンドン～ローマに至る。飛行実日数28日間、総飛行距離1万7403キロの大冒険〕

○1925年8月6日（木）

驟雨、晴。昨夜、母上、平口様へ書翰を書く。信仰のことに筆が走ってしまって、簡単に書くべきだったのが、つい5枚になった。しかし僕はよいことをした。僕は、はからざるに、何者かに導かれて、かかることを書いてしまった。僕は昼も夜もエホバをおもうものとなりたい。僕の思想、言行の根本がエホバの泉からでありたい。泰ちゃんがそろそろやって来るらしい。勉強の妨げということ、思索の妨げということもあろう。しかし僕は忍ばねばならぬ。僕に遣わされた使命は他にある。それは人のためにである。泰ちゃんが来たら、キリストの光というものを投げて暖めてやろう。彼がたとえ感じなくても、厭（きら）ってもそんなことはどうでもよい。キリストがかく僕に命じ給うが故に、僕は「彼」に従ってなすまでである。

この宿の亭主という人、お女将さんという人、使われている女中なる人も皆、誠心の人である故に、全然普通の旅館と異なり、実に居心地がよい。いわゆる気のきいたと云うものほど吐き気をもよおすものはない。心おきなき、サラサラした人々がいい。いつも笑（ニ）コ々々している。金のことがとかく頭にぶらさがる是等の人々にしては実に珍しい人々である。田舎には美わしい人々が居る。天然を教師とする自然の人は健全である。ただ憂う、都人の悪魔が彼等に毒をつぎこんで次第に感染せしめはせぬかと。汝等強かれ、彼等をしりぞけよ。わが祈りは是等の人々に切に捧げられる。自然の子にてあれと。都会を聞いて都会を慕い始めることあらば、それは死への第一歩であると。ここへ来る心ある人は、一度来ると幾年も続けて来ると云うことを聞く。幸なる人よ、汝等、天真なる亭主よ、お女将さんよ、女中よ。汝等は悪しき客をむかえるなかれ。桃郷の米彦とは有名であるそうだ。杉山彦作という米屋だそうだ。名からして振るっている。

宗教のない人にかえって神の子たる者が居る。ただ願う、彼等の梶のあやまらざらんことを。汝等、終りまで誠実の人たらば、天国は汝等のものなりと云ってよいと思う。

一高の奴が浜を歩いていた。彼等と競争するんだなと思った。然らばよし、我はふんばる、がんばる。

夜9時、祈祷。北方を望む。富士山が黒き影を画している。下に沼津の町の燈がボーッと見える。北十字（架）が天頂に仰がれる。見つめた。北天の十字架星に導かれて我が小さき地上の生涯を願わくは。

祈りたきこと、書きたきこと、今日は略す。ただ真剣の生涯のために驀進（ばくしん）。

五月蠅（うるさい）い、下層社会の人間が夜の歓楽をやっている。彼等は良心の麻痺せる人間、あわれむべき人間。救わるべき道ありや。

チタに到着。新聞を見るのはただ訪欧飛行の消息知らんがためのみ。万歳！である。行け、四勇士、日本のために。その他新聞は醜事のみ。

高木八尺様に書翰を書く。兄上の日記を大なる興味を以て見る。大なる感謝を以て読む。

兄上の絶倫なる精力に今更の如く驚く。僕も読書々々、僕に読みすぎることはあり得ないから。昨日も今日も天気はよくないが、トロンとした穏やかな海には実際、三嘆、去ると能わず、水に浸ること多時、岸に揚がるさえ惜しい気持。午後からは、一丈余〔約3ｍ〕の脚立から跳込をやった。始めの2回はやや怖かった。3回目には勇敢に跳ねすぎて、少しみだれ、イタカッタ。クロールも相当になって来て、水泳が益々、愉快である。魚を釣ったり、銛（もり）で刺したりしている。面白そうである。そばへ行って見る。水がなくて断末の近づきつつある魚を見、甲を破られた蟹を見たときに、僕にはすでに面白いの感は消え失せていた。ただかわいそうだけであった。涙さえうかばんばかりであった。彼等はかくして逝く、ああ。僕の肉食をあまり好まぬ一原因は確かにここに存す。トルストイの「禁酒論と菜食論」からも影響されている。海へ来て、太りつつある様である。こんな有難いことはない。頑丈な身体が出来れば出来るだけ、僕の使命も重大さを増すのである。

書かぬと云ってまた書いた。どうも已むを得ない。

○1925年8月7日（金）

晴。今日は一番天気がよく暑い。午後2時頃、寝ころんで本を読んでいたら、泰ちゃんが来た。海へ行く。夕凪に散歩に出て、泳ぎをなせり。跳び込む。富士を望み得た。その心地、薄暮に波が赤く映じている。脚立まで行き、跳込みをする。河童の河童だけが夕方泳ぐようだ。夜、不快な一事がある。僕は祈った。しかして平安が臨んだ。やっぱり神様は僕を見てくださった。僕は日記をつけていて、屡々筆をやめて祈りにおちいる。夜10時半就床。僕がいつも一番おそくある。

○1925年8月8日（土）

晴。今朝は思わず、O, Heller Morgen!〔おお、晴々とした朝よ！〕と言った。富士もすてきで大きい兄さんの写真機の第一におさめた。成功していることを願う。小さい方の写真機は第1巻をうつし終った。クロールすこしものになり嬉しい。今日は200ｍやった。午後4時より5時半まで泳ぐ。波やや荒し。西瓜を今年初めて食べる。この宿はアイスクリーム、コーヒーなど、なかなか優待してくれる。

Pr. Gundert〔グンデルト教授〕に初めての手紙を書く。時間を要すること実に3時間。出来ないのにあきれる。もっともっとやらないと大変だ。文は次の如し。

……〔独文省略〕……。

独乙語で手紙を書いた、初めて。まだ英語では未だかつてない。とにかく、真面目を以て貫き、書き果たしたのは実に嬉しい。

〇１９２５年８月９日（日）

晴。起床、快晴。富士は如何にと見る。北方に一朶の浮雲もなく、聳立、悠々と北天を摩すを見る。暫し望みて宗教的感情にそそられた。

僕は、形式的な手紙は書きたくない。否、もうそんなものは僕に書けない。僕は心情を吐露して書く。僕の書く宛は多く基督者でない人である。故に僕はそこに一つの困しみを感ずる。それは「基督」「神」「聖霊」の文字を用うることを妨げられることである。しかし僕の筆はこれを暗示せざるを得ない。何となれば真理がここから発するからである。源がこれであるからである。「彼」を思わずして僕の言は発せられない。そのとき空である、虚である。彼なくば我は死であるからである。非基督者で僕をやや知ってくれる友が松濤。僕を愛し且つかなり知ってくださるのが武田の叔母様。武田の叔母様には、その肉身の叔母である上から、随分つき入って書くことをゆるされるのは幸である。僕の言に不純をゆるさぬ。「何のため」ではない。「神が動かし給うが故に」である。僕はこれによって書かなければ不純である。伝道と云うも、あらゆる霊的のことは此くあるべきであろうと思う。午前は、10時半まで詩篇とコリント前書。

1時間の水泳をなした。浜辺には、いやらしき者も居た。我が眼は光った。我は独り沖へと泳ぎ出た。未だかつて出なかったほど沖へ出た。我は泳ぎつつ、大海に抱かれつつ、大空を仰ぎつつ、青と青とに全く浸りつつ祈った。それは不浄なる世の人のためであった。直接実見する醜状の未だ脳裏をさらざるとき、これよりほかに祈るべきことを知らなかった。不浄なる世の人のために、滅び行く魂のために。大自然は僕をしかと抱いてくれた。僕は海に感謝した。僕は空に無限の情をよせた。安息日の午前はかくあった。

午後2時より3時まで水泳。雨、にわかに襲う。西瓜を出された。僕は思った。おお、汝、西瓜よ。いとも甘き香よき水よ。汝は痩地に育てられて、かくも水を蓄う。ああ、造物主の偉大なる不思議なる業。汝は日夜不断に水を蓄う。人は渇きたりと云いて汝を捉る。汝は無言の中に汝自身を人に委ぬ。汝は断ちわられ、汝は人のなすがままに。汝は渇せる人の咽をうるおし、人を喜ばせる。人は言う「うまい」と。人は言わぬ「有難う」と。汝の無言の犠牲を知る人ぞなき。我はすべての人をあわれみて汝に言わん。「彼等の不遜をゆるせ。我は汝に感謝す。また汝を通して、汝を創造りし神に感謝し奉る」と。

汝は娯楽（所謂）に時を費やすべからず。また汝はそれをなすの意を有せざるべし。それは汝にふさわしからず。汝は（敢えて言わん）、第一等のことをなさざるべからず。それは生命のことに関す。曰く、聖書を読むべし。汝の好むこれらのことあるに、争で娯楽に費やす時間あらんや。汝、娯楽のかわりに眠るべし。よきことをなすの精力をつくるべし。

〇１９２５年８月10日（月）

晴。午前6時起床。浜辺へ行った。西の空に天の橋〔虹〕を見た。〔英文〕

My heart leaps up when I behold
　　A rainbow in the sky:
So was it when my life began,
So is it now I am a man
So be it when I shall grow old
　　Or let me die!
The Child is father of the Man:
And I could wish my days to be
Bound each to each by natural piety.

――The Rainbow, William Wordsworth

〔註：「虹」（ウォーズウォース）小池訳、著作集第８巻『詩歌集』より〕

わが胸は欣び躍る、
大空に虹をし見れば。
人生の曙に然かりき、
成人の今も然かあり、
老年の暮も然かあれ。
然らずばわれ死なまほし！
幼児は成人の父ぞ。
魂極る生涯の日々を
結びてよ生来の虔心。

なんと美しい虹か！　いかに穏やかな海か！　その面は鏡のようだ。私は磐の上に坐って心から祈った。それから、私は聖書、詩篇第19、23、24、25篇を読んだ。〔英文〕

「1**もろもろの天は神の栄光をあらはし　穹蒼はその手のわざをしめす。**2**この日言をかの日につたへこのよ知識をかの夜におくる。**」**（詩篇19・1～2）**〔英文〕

午後1時、兄上は東京へ帰る。沼津駅2時発の列車で。こぼり婦人も3時に去る。私は彼女の親切に感謝した。彼女によって我々は沼津の海岸での夏休みを楽しんだ。〔英文〕

今日、向山堂から『聖書の研究』8月号が来た。第2の友来る。感謝。残る第3番目の友は『旧約と新約』。『聖書の研究』を読んで、考えた。否ある声を聞いた。曰く、

「汝、黙し居れ。汝、勤めよ。汝は今、22才なり。汝は25才まで3年間、全力を尽くして励むべし。然らば、汝は汝の道を定めらるべし」

それはいとも厳粛な声であった。この聖霊の御言を忘れることは出来ぬ。

聖サンダル・シングは、よき師、よき友、永遠に我と共に語り、我に語れ。佐藤繁彦先生に感謝す。よき書を読ませてくださいました。この書は友の一、いつまでも繰り返して

読まれる書であります。懐かしの友が一人、ああ感謝。僕は外に人を要しない。
僕は第一にイエス・キリストを愛するもの、それから多くの聖き人を恋人として有つ。
これは所謂恋人ではない。それならいくら居ても乱倫ではない。
7月11日～8月10日、夏休みの前半期が去った。
8月11日～9月10日、夏休みの後半期が来る。
前期はどうであったか、顧みる。
11日～15日、青木の転宅に働いた。
16日～25日、家のこと、本のことで、かなり時間をむだにしながら。しかし、よきものは常に僕をとらえつつあった。藤井先生のお祈りがあった。
26日～31日、山本のこと、準備のこと。ここにもむだな時間があった。
8月1日～10日、やや仕事をなした。しかしまだむだがあった。しかしこの10日は感謝であった。龍二兄上と二人で暮らした。1週間は楽しくあった。泰ちゃんが来たのは僕の本意でなかったが、已むを得ぬ親戚関係である。〇〇様の同情と思慮ないこと、及び邪知を弄すること嘆息にあたえするものあり。我が心いたく悲しむ。彼女のために。
神とキリストと聖霊と、聖書と宗教書と、内村先生と藤井先生と佐藤先生は、それは僕の心をはなれることがなかった。兄上と鴻子伯母様は、それは僕を守って居られた。
僕の生活は全然、常人と異って来た。僕は祈りをなした、考えた。母上さえも、兄上さえも、以下勿論親戚の誰もが僕の心を心としてくれないことも明らかである。母上、兄上、武田の叔母上は余程理解はあるが、僕の深刻には到底つき入ってくださらない。僕はこれでよい。僕は何があっても僕の信ずる十字架の道である。これをおいて外に道はないのである。何がどうなろうとも、前途は全然、神様におまかせする。天のお父様がしっかり、僕を導いてくださる。
金も要らぬ、衣も要らぬ、食物も要らぬ。とらばとれ、迫害するならしろ。何もおそろしいことはない。ただすべてのくるしめにキリストが耐えてくださる。僕はキリストさえしっかりつかめれば、それですべては善である、能である、安である。歓びである。感謝である。ルッターがきっと天で然り、Ya! と呼んでいるだろう。ああ、聞こえる、聞こえる。ルッターが Ya と。アーメン。Luthers “Ya!” im Himmel.〔ルッターの然り！天にて〕
来るべき一日よ。願わくは汝、我を一段とキリストに導けよ。時機なり、時機なり、よく憶えよ。
クロールのかなり出来るようになったこと、中距離に強くなったこと、跳込（逆跳）の上達したこと。これはたしかしに嬉しき収穫物である。午前に午後に、雨にも曇にもよく泳いだ賜である。逆跳は手を開いて出来る様になったのが今日初めてのことであるが。おそろしいという感じはなくなった。2丈〔約6m〕以内なら自信がある。かつては2尺〔約60cm〕位のところから（片瀬の頃）跳び込むのもこわかったが、今は2丈以内ならと云う。大なる

進歩である。これなら大キイ兄サンにもヒケをとらぬ。天にてお笑いのことであろう。

○1925年8月11日（火）

晴。夏らしきよき日。コリント前書13章～16章終りまで、独乙語の聖書によりて。肉太文字（イタリック）の箇所に来る毎にルッターの力強き信仰の声を聞くを憶えて実に有難く感ずる。

午前、水泳1時間半。泰ちゃんに独乙語を教える。これまた僕の力のためしでもある。『聖書の研究』を読む。「日本国と基督教」、アーメンである。これを真に解し、真に感激し、真に起つ人の幾人であろうか。僕は知らぬ。少なくも僕はその一人にして戴きたくある。こんなことを言うとまた、先生に叱られるかも知らない。しかし叱られてもいい。僕は真理に於て内村先生と合するからである。『聖書の研究』3年間と先生のご講演10回位と、藤井先生のお祈り数回と、『旧約と新約』数か月と、内村、藤井先生の著書の大部分と、佐藤繁彦先生の『ルッター研究』とによって僕は導かれて基督者となったことは幸である。禍なる基督教会なるものを知らない僕は幸である。

神と聖書と聖霊と、地に落ちし一粒の種とは僕の心の最奥にはたらいたのである。かかるが故に、僕に強みがある。神の力の強みがある。高慢にならんとしない。しかしこの強みは誰も抜くことをゆるさぬ。『聖書の研究』は何と云っても大恩人である。感謝！　感謝！

午後2時半～4時半まで水泳。跳込はやめた。頭がすこし痛いから。大段から跳込むこと昨日4回、中段から5回、今日は大段から3回、すこし頭をうちすぎた。手をもって頭の前に方へ出せばよいのだろうが。十字形で跳んで、水面に至って手を伸ばして跳ぶ方法が出来る方になってうれしい。勇敢になったことは一つに確かに、僕の意志が宗教によって強くされたからである。意志薄弱と自認し、いつになったらこの意志薄弱がなおるかと心配していたのが、僕の「新生」のはじまるや次第にそれは強くされて来た。信仰の強いときに最も強い。

夜快晴。今晩見た星々、アンダーラインのしてあるのは今晩初めて見たもの。

1　Draco〔りゅう座〕、and its Etanin, Grumium
2　Lyra〔こと座〕、and its Vega
3　Cygnus〔はくちょう座〕、and its Deneb, The Coal Sack, No.61
4　Aquila〔わし座〕、and its Altair
5　Delphinus〔いるか座〕、and its Sualocin
6　Sagitta〔や座〕
7　Vulpecula and Anser〔こぎつね座とガチョウ〕、Kaus Borealis, Kaus Australis
8　Sagittarius〔いて座〕、The Bow, The Milk Dipper
9　Corona Australis〔みなみのかんむり座〕

10 Ophinchus〔くびつかい座〕、Ras Alhague, Ras Algethi
11 Bull of Poniatowskia
12 Scorpio〔さそり座〕、Antares, Shaula, Lesuth
13 Libra〔てんびん座〕、
14 Corona borealis〔かんむり座〕、Gemma
15 Hercules〔くルクレス座〕、Great Cluster
16 Boötes〔うしかい座〕、Arcturus
17 Virgo〔おとめ座〕、Spica
18 Canes Venatici〔りょうけん座〕、Cor Cluster
19 Cassiopeia〔カシオペア座〕、Caph, Schedar, Ruchbah
20 Andromeda〔アンドロメダ銀河〕、Naked, Eye Nebula
21 Ursa major〔おおぐま座〕、
22 Ursa minor〔こぐま座〕、Polaris
23 Pegasus〔ペガサス座〕、

「なんぢ昴宿（ぼうしゅく）の鏈索（くさり）を結びうるや」（ヨブ記38・31）

The Pleiades〔プレアデス星団、おうし座、すばる〕さえ、終には東の山の端にキラキラして来た。「星座早見」とA Field Book of The Stars〔星のフィールドブック〕とOpera-glass〔望遠鏡〕とを手にして。仰ぐこと30分。これほど熱心に見たことは初めてと云ってもよい。ただ漫然と見ていた星は、整然として眼に映じた。聖き多くの友は手に手をとって整然と天を東から西へと廻っていた。最後にはPleiadesさえ現われ、僕に笑って久しぶりの顔を見せてくれた。全天を感極まって瞻上（みあ）げたとき、僕は俗界のものでなかった。僕は聖き友と心を一つにしていた。眼を下にして灯火と人の声を聞いたとき、僕はがっかりした。なさけなくなった。

しかし有難い。僕の友は僕がどんな境遇にあろうとも、僕と語るべく天に在る。夜になれば出て来る。夜が会見のとき。星について、天然について、今晩のお祈りについて書きたいことはまだあるがやめる。まだ義務が少し残っているから、それをやらねばならない。

ただ一言記すべき大事なことがある。それは今日、嘉代子様から御手紙が来たことである。とにかくここに筆をおく。

内村先生著「ヨブ記講演」読了。With hearty Thanks, With unutterable Prayer!〔心からの感謝、言うに言われない祈りを以て〕。ヨブ記の偉大、神を見ること。これを知らせて戴いて、私の人生は一段と奥深く入る。

嘉代子様の御手紙から、

「御恩寵にみちみちたお手紙ほんとうに嬉しく拝見いたしました。何ですか、拝見している胸が一杯になりました。ほんとうに御手紙いただいて力づけていただきました。

心から御礼申し上げます。」

の文頭を読んで僕ははずかしくてたまらない感じがした。嘉代子様の御信仰のいかに麗しいかを僕は察した。僕の方がかえって本当によい御手紙と御心で有難く感謝致すのである。僕は手紙を書いたり、読書したり、静かに思ったり、祈ったり、天を仰いで星を見ているときに、本当に信仰に燃える。しかし他の多くの時間に於て信仰のうすらぎの中に生活していることを心から恥じる。母上、兄上からこのことを指摘されるのは、僕に最も辛いことである。故に僕は、僕の義務をなすとき、対人関係にいる普通の場合に於て、信仰に生きなければならない。愛に生きなければ本当でない。僕はこの信仰、この愛のためにあくまでも信仰の戦をつづける。

「私は幸い早くから神様の愛を戴く事が出来ましたが、ほんとうに御許様（おんもとさま）の信仰を羨ましく存じました……」

ああ、僕は嘉代子様に此く言われる者であるか。否！

「辰雄様もまだまだこれからの戦が私共女より以上大変で入らっしゃる事と存じます。どうぞ御言葉通りしっかり御歩み下さいませ。そして御導き下さいませ」

有難く拝読する。本当に僕はまだまだであるが故に。最後の一句は僕には出来ない。僕が嘉代子様に従ってである。美わしき信仰のお手紙、僕は高島の伯母様と、同じく嘉代子様の方にかかる女の方を知らない。なお、

「苦い苦い一年をすごしました。地上に居る事がほんとうにつらく感ぜられました」

「両親を失いました私共もし神様の愛をしる事が出来ませんでしたなら、どんなに心淋しかったわかりません」

また、女中がなくて独りでおはたらき、しかも御子様がおありであるから、お忙しい御事である。Toiling, ―rejoicing, ―sorrowing〔労（はたら）きながら――歓びながら――悲しみながら〕の御生活、本当に僕のよき御手本である。かくれたる信仰の女の方は本当に美わしくある。神様は第一におよろこびになることであろう。

○1925年8月12日（水）

晴、風あり。訪欧機、クラスノヤルスク着。万歳と遥かに呼号す。午前、コリント後書に入る。独乙語の勉強。“An die Freude”〔歓喜に寄す〕暗誦の練習、ひきつづき。

午前、水泳1時間半。小さい小学生10数名を相手に砂浜にねっころんで、笑い、語る。彼等の奇問に答えるのは相当頓智（とんち）を要する。とにかく、無邪気でアケッパナシで可愛い黒ん坊連である。彼等は僕の言うことを信ずる。疑いもなく受け入れる。だから、うっかり間違は言えぬ。彼等に福音ゴクゴク平易に面白く説いたら、すなおに入るだろう。小さいときから沁みこませるのは大切なことだと思った。日本に偏屈な基督者が多いのもここに起因する。イエス様が「天国は此くの如き人の居るところ」と言われたのがよくわかって、

本当に嬉しく感じた。彼等のために、心ひそかに海の中で祈った。

富士が見えた。脚立を上げる手伝は面白かった。ワッチョワッチョと怒鳴るのもいいものである。午後、やや風あり。海は風向きよきによりかなり静か。泰ちゃんとボートを出す。山内さんの三人のお嬢さん、二人のぼっちゃん、千葉さんの一人の坊ちゃんを三度に分けて乗せて漕いで上げた。人を喜ばせて嬉しかった。牛臥山の峠に二人で漕いで行った。千本浜を遥かに望み、感慨深きものがあった。兄上のかつて立ちし浜辺である故に。我は残されてあり、我が使命は大なり。我が使命終る日まで信仰の生涯。アーメン。

贅沢な旅館が立っていた。たのまれても入りたくない。ブルくさい。我は、米彦の如き素朴を愛す。

脚立があった。高さ1丈5尺〔約4.5ｍ〕はあると思われた。先ず僕の上った初めての高魯である。逆跳をテッペンからやった。Like Swallow!〔ツバメの様に〕？　快たるものであった。しかし、なるべく人に見えぬ様、沖に向かって。もうこわいと云うことはなくなった。勇敢になった。有難いことである。僕の弱虫がかくもなったとは。帰る。また夕凪に泳ぐ。今日は本当にヘバッタ。また一段と鉄の色を増した。糖分要求で食後の羊羹はかくべつ。半本ペロリ。

僕は快楽、享楽のために海へ来たのでない。避暑のために来たのでもない。天然と交わらんため、自然を通してお父様の聖旨をお聴きせんため、仰ぎ瞻(みる)んため。また身体を鍛えんがために来た。しかして、一日一日は信仰の一日一日であらんがため。勿論。愛の一日であらんがため。働きの一日であらんがため。キリストの愛、願わくは私を通して泰ちゃんに能かんことを。僕は独りであらんことを願ったが、ここ一週間はこれをゆるされない。聖旨なる故に僕は人に愛を与える生活をなさねばならん。

基督者は如何なる状態にあるも基督者たるを要する。これを措いて外に基督者と云うものはないのである。何となれば、基督者とは頭の人ではなく、心の人であるからである。

兄上から早速、写真8枚送って来た。その御親切に感謝した。12枚の中8枚成功、4枚は失敗。まずよし。室内のは映らなくてよかったくらい。だんだん手加減がわかってくる。兄上との一週間は忘れられぬものである。母上、東京にある母上の御健康のために祈り奉る。本当に母上様を思うと僕は涙より外にない。神よ、願わくは母上をあわれみ給え。アーメン。願わくは、母上のよろこぶ兒とならしめ給え。母上の信仰をたすけ、共に共に信仰の生活をおくる幸を与えさせ給え。信仰未だし故に真の実行出でず、愛あらわれず、願わくはこの身をしっかり導き給え。アーメン。相変わらず星の夜。10時半。

○1925年8月13日（木）

晴、烈風。青年再び来らず、憶えよ。生々溌剌たるこの時、汝、為さずば万事已む。汝の心身の鍛え上げらるべきは正にこの時なり。生気に溢れて善きをなせよ。汝、今、根本

を基づき上ぐればその栄は年と共にいやまし、その葉は茂り、その緑はしたたる如く濃く、その幹はいやまして強くならん。この時にあたりて時を失するは最大の罪なり。そは死、その中より生ずればなり。この成長は一に汝の神への信仰と愛とによる。然り、アーメン。

松濤より葉書来る。「忙しいものには忙しいのは辛い」と云う。彼は多忙の人である。同情はする。『ファウスト』の暗誦、お願いしますと書いてある。こっちも多忙である。「ファウスト」に、シラーの「喜びに」に、「ルッター」に「神曲」。我は全力を尽くさん。文は、すこし不謙遜。尤も僕だと思って親しみのつもりかもしらないけれども、基督者の親しみはこれと異なる。「腹をこわさぬ様に呉々もお願いします」、これは余計なこと。まだ僕がそう思われているかと思うとなけさなくもある。それは身体は外観、人より小さく弱そうであるが。筋骨は小なりといえども頑丈、ことに皮膚の強いことは自信あるものである。風邪をひかないことは本当に有難いことである。かく水泳を好み、冷水摩擦をするからであろう。「身体が第一だ、死んだものには花は咲かぬからね。地上の天国を希望にもって居るものには余りはやい天国のお召しはお断り申す」と最後にある。彼の言う心は大体わかる。しかし、信仰の友ならばかかる言葉は出ない。彼に悔改の時が来るか来ないか、恐らくむずかしい。彼は勤勉、正義の人ではあろうが、罪に泣き、アバ父よと呼ぶに至り得ない人かも知れない。ただこのために祈る。

政美兄上の日誌を読みて感激す。僕辰雄は必ず兄政美の跡をしっかり歩まざるべからず。政美兄上の信仰の生活、愛の生活をしっかり歩まざるべからず。僕はもはや人から非基督者、なまぬるい基督者と見られること、即ち彼等の眼には、くみしやすし、あなどりやすし、おひとよし……などに映ずることなり、是は一切ならぬ。基督者、基督者、基督者でなくてはならぬ。彼等の言動によりて基督者たることを一歩も譲りまげてはならぬ。これ亡びなり、背神なり。

神よ、いかなれば兄上をかくも速く召し給いしぞ。いかなれば、かの信仰、愛のよき神の子を、もっとこの世に働かせず、召し給いしぞ。かの絶倫の才能の士をとり給いて、この怠惰無力の者を残し給いしぞ。ああ神よ、いかなればかくことをなし給いしぞ。我は苦しむ。我は果たして兄の遺志をつぎ、兄のことをなし得るの才能ありや。何故に、聖書学者にして健全なる法律学者たらんとせし兄を用い給わざりしや。我が力はあまりに彼に劣る。「人は人にてあれ」と云うことを。人の価は、仕事の何たるかにあらず、信仰と愛と勤勉の生涯たるや否やにあることを。

一粒の麦地に落ちてまず死ねり。涙！　アーメン。我はその初穂たるなり。感謝の極み、アーメン。故に我が生涯は十字架を負うのそれならざるを得ざるなり。アーメン。

初めの種は後多くの実を豊かに結ばんがため、さらば我が生涯は何の為。神の栄光のため、人の魂のため、生命のため、我が外的の道は我知らず。されど我が心の道はすでに定められたり。これによりて歩み行きてすべては聖旨のままに。アーメン。貴き救主の御名によ

りきこしめし給え。アーメン。10時半。
喜ばしき義務。なさざるを得ざる義務。なさざれば我亡びを感ずる義務。即ち、我が生命そのものの存する義務。
朝、新約聖書。
午前、独乙語。
午後、英語、その他有益の読書。
晩、宗教書。
夜、日記、書翰。午後9時、祈祷。
就床前、旧約聖書。睡眠8時間。アーメン。

○1925年8月14日（金）

雨。午前、水泳30分。水温17度位かと思わる。初めての冷たさ。脚立まで泳ぎ跳込2回。全力を尽くして50m泳ぐ。上る。海は鏡の如く穏やかであるが、冷たくていかんともしかたがない。泳いでいるものは外になかった。
12時40分の汽車で山内さんも泰ちゃんも帰京。泰ちゃん、余程病状がよいが、まだハッキリしない。精神衰弱とは厄介なもの。これは精神と、規則的生活でなおると思う。独りになった。やっと落ちついた、と云っては悪いけれども、僕の望んでいた「静か」が得られて有難くある。時には独りで数日を送ることは大切なことである。
さて、聖書と祈祷と沈思と読書の生活が数日行われるであろう。願わくは、静かに強く我が心をとらえたまえ。アーメン。
武田の叔母様から簡単な御葉書が来た。御健康で有難くある。僕の10回位のこの春からの手紙に初めての御返事である。それは僕の方から御返事をお断りしたからである。それは一、ある関係上から。他は叔母様の御健康が之をゆるさないであろうし、また、僕がかく差し上げるのは僕の感謝の声であって、返信を求めるものではなく、ただ叔母様がと共に神を讃えてくだされば足りるからである。
汝は怠けものである。汝は汝の予定を成し遂げたことがない。読みかけたら、どんな本でも10頁以内でやめることをゆるさずと定めよ。汝はこの10頁におそらく、当初は耐え得ぬであろう。しかし汝は失望してはならぬ。汝は飽くまでも、眼をむきだし、眉を立て、歯をくいしばってガンバラネバナラヌ。汝の標準は10頁でなくてはならぬ。汝がここにGewohnheit〔習慣〕を得たならば、汝は仕事に敏速を得て、政美兄上の如くなるを得ん。さらば、励め！　励め！　何がどうあろうとも励め！　励むは之神への道。
一つ勉強に頭の疲れたとき、他の勉強に変更することはよき休息ならざる休息である。ヒルティーの言った通りである。また、詩を音読したり、讃美歌を歌ったり、名画をみたり、星の図を見たり、するのは僕にとって最大の心やすめであり、また娯楽であり、また次の

仕事への励ましである。ああ、人生とは苦にして苦にあらず。永遠の生命、聖国を明らかに望み得る私達基督者はいかに幸なる日をこの地上にもおくり得ることよ。この平和の生活も神の賜。しかして、この平和の中に十字架あり。否、十字架の中にこの平和あり。基督者の生活は所謂楽しき、おめでたき生活ではない。所謂無事平穏の生活ではない。戦闘の中の平和、大波が荒れ狂うとも大海の底は静なる如き平和が、基督者の深淵な平和、感謝、讃美の平和である。これは、体験する人のみぞ知るである。

He in me and I in him.〔彼は私の中に、そして私は彼の中に〕

彼、政美兄上と私辰雄とは日と共に近づきつつある。彼の日記を読んで、僕はそこに Ya! Amen!〔然り！　アーメン！〕と呼ぶことのみを見出す心地がする。彼が着々と義務を毎日毎日果たして行く気持よき筆の跡を見て、僕もこれに倣わなければならない。僕の今の最大のことは己が Pflicht〔義務〕を果たすことであろう。真基督者は勤勉である。Week-days〔平日〕を完全に働き通して The Lord's-day〔主日〕に完全に休むのが真の基督者の生活である。兄上は正にこの実行者であった。彼はよく自分のことも、一家のことも、他人のことも働いた。彼は時間を貴んだ。彼は故に一事をなすときに夫々専心であった。故によく読書もした。敏速であった。彼はあまりに忠実にして、竟に己れの健康の害されつつあるも知らず、いとわずやった。ことに彼のこの世の最後の数年ほど雄々しく、美わしきはなかった。聖国をさして行くものにふさわしき数年であった。故に彼は聖国へ喜んで行った。僕も及ばずながらこの兄の道の跡を最も喜んで歩まんものである。

願わくは、導き給え。兄上の聖と純と勤勉とを我に宿らしめ、我をこれと化し給え。全然第二の政美たらしめ給え。アーメン。

今日はマーラナサ！〔私たちの主よ、来てください〕と云うよき言を憶えて感謝である。

○1925年8月15日（土）

曇、晴。昨夜来の豪雨、今朝まで続き、全地は全く潤うた。昨夜、嘉代子様に手紙を書いた(第2信)。それは僕の感謝とお詫びの声であった。高島鴻子伯母様が召されて残された嘉代子様。政美兄上が召されてあとに残された辰雄、僕。これは決して意味のないものと思われない。かつて聖なる交がありし如く、今も聖なる交があるべきである。僕は嘉代子様と普通の交わりは出来ない。お手紙の上の交がゆるされていると思う。即ち、霊の交である。祈りの交である。神を讃美し、神に感謝する声の交である。それで基督者は普通の交以上に親しくあり得る。嘉代子様を、既に嫁せられたる婦人。また年長者である。故に、僕は決して対等に思うことは出来ない。どこまでも婦人の方であり、僕の姉（兄弟姉妹の）であることを忘れてはならぬ。お互いに鴻子様と兄の心を以て、聖くその時までこの世の聖交、聖戦をなしたいものである。そして僕は、夙に信仰に入られた嘉代子様に大いに導かれることを有難く思う。

日が照らないけれども海に入った。跳込み1回、クロール50ｍ。30分であがった。もう海もそろそろ泳ぐに適しなくなった。僕ばかり、かかる地に居るのは勿体ない気がする。しかし20日までゆるして戴きたい。それは意義あることであるからである。身体も出来た。それ以上に意義あることであるからである。……〔独文省略〕……。

○１９２５年８月16日（日）

聖日。天候未だ定かならず。されど雲の後に光あり。偉大なる哉、イザヤ、イザヤ書、そはその上に der Unsichtbare!〔目に見えざるもの!〕在まし給う故に。この書を読まざるものは誰か。自分であった。知る、今にして知る。聖書は尽きざる生命。旧約１２５８頁、新約３６８頁、合わせて１６２６頁。この驚くべき書、これより生泉の水汲まざるものは禍なる哉。毎日聖書を読まざれば措かざるに至れる我が身。ああ、神よ、神はその恩寵を以てかくも我をとらえたまえり。讃美し奉る。感謝し奉る。願わくは、我が旅路終るまで聖書が我が唯一の書にてあれ。この世にて天国を見るはこの書によりてのみ。「地上の天国」と誰かは云う。浅薄なことを云うな。汝等、聖書と親しき友とならずして何ぞ「地上の天国」と言い得んや。

聖国は聖国なり。地上は地上なり。何ぞ今この地上に天国あらんや。聖国はあり。確かに存す。聖霊によりて知る。そは而して来るべきものなり。待たるべきものなり。マーラナサ！　マーラナサ！　アーメン！

ああ、基督者ほど、生き生きしたものが世にあるか。彼は青年、壮年、老年たるとを問わず、神の幼きものである故に、皆、生き生きして居る。この世を去るに当たって、彼は慨嘆、悲痛、絶望、後悔の声を揚げない。彼は感謝し歓喜し讃美して、彼の希望の前途を神の聖手に任せまつりて、喜々として別をつげる。ああ、その差を何と云おう。同じ人間にして、神に依ると神を棄てるとに、この生と死との最大の差を生ず。何故に世の人は自ら死をとりて消え行くか。

怒濤が狂いよせる。泳ぐ人が僅かである。勇敢な村の兒が6、7人出て居る。波乗りをやって居る。天真爛漫なる友、彼等はこの間から僕と浜の友である。欣然として僕のところへやって来た。2、3、言をかけた。そして彼等に波乗りの要領を教えて、自分もやった。彼等はすぐうまくなった。勇敢にやるからすぐ上達するのであると思った。彼等の喜ぶ顔を見て、僕は言われざる喜びを感じた。「天気になったら浜で写真をとってやる」と約束した。「彼等が今ある如く、純な心で大きくなって神聖な労働をしてくれれば」と祈らざるを得なかった。僕は小兒（神の）なるが故に、小兒が好きである。敢えて言う、彼等小兒の兒を察するに僕は秀でて居るかもしれないと。聖書と自然と小兒（コドモ）と、これが僕の友である。

『旧約と新約』62、藤井先生著、第三の友、来る。感謝。

兄から手紙が来た。写真も4枚おくれて来た。自分の像（斜横から机に向かっていると

ころを撮ったもの)、政美兄上に似ているので自分ながらハッと思った。随分黒く焼けている。並んでいる本の字の読み得ないところがかえってよいと思った。これは自分自身の記念で、人に見せる写真ではない。イザヤ書を開いて読んでいるところ（イザヤ書925頁)。

並んでいる本の題名。Hope and Promise Calender。Evangelischen Gesangbuch。讃美歌。Goethe Werke I。聖サンダル・シング。A field book of Stars。ダンテ新生。Für Schlaflose Nächte, H.。ダンテ神曲（地獄・煉獄・天国篇)。西洋哲学史古代・中世、安部能成。『ファウスト』新渡戸先生。How I became a Christian, U.。Gechite von Schiller。独乙語教科書3冊。Imitatia Christ, T.A.Kempis。ヨブ記講演、内村先生。星の研究、吉田講詩郎。聖フランシスの小さき花。ルーテルの生涯及び事業、リンゼー、藤井先生。独乙語聖書（新約と詩篇)。〔座卓でイザヤ書を読んでいる辰雄の写真貼付あり〕

海岸で撮った写真〔海面から上半身を出している裸の辰雄の写真の貼付あり〕。後ろは御用邸の石垣。睨んでいる様である。何か僕の心にあった！

藤井先生に長文の手紙を書く。

○1925年8月17日（月）

雨。ひきつづき雨。各地に被害ありしを新聞で知る。活眼を以て活書を読め。All eyes, All ears!〔注視する、しっかり聞く〕よりも living eyes, living ears!〔活眼活耳をもって見、聞く〕である。富山から手紙が来た。彼が失敗によって一歩一歩高きに向かって進んで行くことを感ずると聞いて、喜んだ。彼は英語の学力では確かに大学に入れる資格があったが、他の学課で失敗して、一年おくれることになった。彼のために、よき鞭にして恩恵の一年であることを祈った。そしてその願いは、彼の声として今聞くことを得て嬉しく、感謝し奉った。彼が直接この入学の失敗をささないにしても、彼のために喜ばしき声である。そして私のためにも然り！アーメンなる声である。基督者はがっかりしてしまったり、あきらめてする様なことはない。彼はどこまでも愛の父にすがりつつ進む。信仰の友、森田桂次君と云う人（理乙）一年生を得て、彼が僕のところへ同居することが出来ないかしらと問うて来た。彼は寮を出て静かに勉強したいと云う。彼が僕の心と合うか合わないか知らないが、富山が真面目に僕にたのんだ人なら、彼は恐らく僕と心を共にし得る人であろう。信仰を共にし、共に語るの友一人もなき高校に於て彼が真に然るならば、僕は本当に有難い。神様の御恵みにより一人の友を与えられたのかも知れない。僕はその真であることを殆ど信ずる。故に祈りを以て待つ。

ヒルティー先生をして、神経衰弱病者を診しめば、先生は患者に何を為(さ)れるであろう。薬よりも言であるにちがいない。かかる医者が日本に居るか、僕は知らない。『眠られぬ夜のために』は毎日々々本当に有難いことを語ってくれる。

僕は手紙を書くとき、真剣である。祈る。深く考える。そしてすべて愛と謙遜のもとに

と祈る。手紙は大切である。何となれば文字は不完全ながらも神の御心をつたえるものであるからである。大抵は1時間、或いは2時間さえかかることがある。

波荒し。雨降れど、我が勤め、我が誓なる故に泳ぐ。また快なり。一日として入らざる日はなし。

○1925年8月18日（火）

晴。低気圧通過して、漸く青空を見る。蝉の声も元気づいて来る。聖書また聖書。勉強も皆、聖書に関係するものばかり。聖書と自然、これが僕の生活の全部、他に何もなし。俗物は悉く遠ざかる。有難き極み。

学生のくせに給仕なんかしてもらって居るものは誰だ。馬鹿者ばかり多い世の中である。何が常識だかわからない。基督教の純なるものなくて何が出来るか。僕は本当に有難い根本をいただいた。これあってすべてのことが益である。悪魔をうんと睨みつけることは必要である。聖書を根本として僕は大いに働く。何となれば、神様からかくも選ばれたからである。人のために、世のために、自分のために、名のために、そんなために働くのではない。ただ神様、お父様の栄光のために働きたいばかりである。それが目的の全部である。

午後から理髪屋へ行く。2時から海、雨が降っているのに出掛けた。水温は意外に高くて、実に楽でかえって面白かった。水面を強く打つ雨の粒がダンスしている。水も青く奇麗である。思う存分泳ぎまわった。跳込みもした。泳いでいるものは僕の外に4、5人。3時すこしすぎまで1回も揚がらず泳いだ。クロールもすこし速くなってうれしい。この頃ことに健康体であることを感じ、感謝である。雨であろうと、波が高かろうと、泳げる身となって、雨中を自分の身体は小なりといえども健康であることに本当に感謝せざるを得なかった。思わず讃美の声が出た。この身体をいただいた以上、僕は遊んではならぬ。働かねばならぬ。

ヒルティーは相変わらず僕の言いたいことを言ってくれて、然り！然り！である。

西瓜とアンの菓子二つを食べる。この旅館ほど旅館らしくない旅館はまずないと云ってよいかも知れない。主人も女将さんもしっかりした人間である。主人なる人は本館に居るが、客にして他の客に迷惑なことをしたり、よからざることをするときは遠慮なしに怒鳴るとのことである。僕はこれを聞いて、「さなり！」と思った。乃木将軍に愛せられていただけある人だ（御用商人である）。お女将さんは別館、当館に居るが、彼女の女中を使う仕方に感心した。女中は、それ故に子供の如く彼女を慕っている。宛然一家の娘をして働かせているの感がある。こんな旅館の状をどこで見られるかと思った。心ある客が一度くれば度々きたくなるのは当然の勢である。

彼等女中は、夏だけ手伝いに来ているという状態。皆、スレていることはなく、しっかりしている。喜々として働いている。よく働く。正常である。飾気がない。お世事がない。

小兒らしい、美しい心である。顔がそれだからハレバレしている。真の美は心から発する。美人の真の意味はこれでなくてはならぬ。現代的美人は僕の眼には醜人と見られる。彼女等に迷う男は言語道断である。ただ願う、彼女等が純真の道をいつまでも歩まんことを。彼女等に結婚問題その外色々の問題があろう。ただ憂うるは世の蛇に迷わされざらんことである。彼女等に宗教の心あらば（勿論基督教である）、いかによからんとそれのみが残念である。而してただキリスト教と云ったのでは、今の一般の所謂良民にはやや不快な感をおこさせ、顧慮（こりょ）に価しないものとしてはねつけられるであろう。

ああ、真のキリスト教、パウロの、ルッターの、ヒルティーの、ケーベルの、……の基督教は世の人に知らしめる如何に難きかな！　涙である。しかれども、内村先生の『如何にせば基督者となり得るか』なる一小冊子の趣旨を以て真剣にとけば、求むる心の純なるものがすこしでもあるならば、望みはあると思う。

この頃、青木の人々のために祈るところが強い。人は智にあらず、心なりと云って上げたい。星あらわれたり。午後9時、感謝のお祈り、願いの祈りが千本浜の方を望みながら捧げられた。かって千本浜に立ちて祈られた兄上を思いつつ。日本国のために、東京市民のために。母上のために。内村、藤井、畔上、塚本、佐藤先生のために。天の伯母様、兄上のために。地の嘉代子様、武田伯母様のために。コリント前後書、独乙語聖書で読み終る。

兄上の日記、１９１９年1月のところを読んでいるが、実にその言葉は生きて僕に話す如く、また僕と共に祈るが如く、然り！然り！　アーメン！アーメン！　有難うございます、有難うございます！　と云って従うことばかり。本当に兄上は僕と今は他界一体である。これただキリスト・イエスによってのみ然るを得る不思議にして真なる事実である。実に愉快で愉快でたまらない。話す。最も静かな時。人の声のしないとき、静かに日記を開いて大きい兄さんと話すことは最大の楽しみの一つである。アーメン。

内村先生が沓掛（くつかけ）温泉に居られるとの由。あの夏（１９２３年）を思い出す。先生の御健康の為に切に祈りまつります。

in den Ferien 休暇中の日課。

A.M. 6:00～6:30　Aufstehung〔起床〕
N.T.Bible〔新約聖書〕
A.M. 7:30～10:00　Deutsch〔独乙語〕
A.M. 10:00～11:30　Schwimmen〔水泳〕
Noon (Mittag)〔昼食〕Mittagspause〔午休憩〕、Mittagsschlummer〔午睡〕
P.M. 1:30～3:00　Lesen, English〔読書、英語〕
P.M. 3:00～5:00　Schwimmen〔水泳〕
P.M. 6:00　Abendessen (Abendbrot)〔夕食〕
P.M. 7:00～10:00　Lesen, Deutsch od.English od.Japanese〔読書、独乙語又は英

語又は日本語〕

P.M. 9:00　Gebet〔祈り〕、O.T.Bibel〔旧約聖書〕、Tagebuch〔日記〕、Brief〔手紙〕

P.M. 10:30　Schlafengehen〔就床〕

in der Schule 通学中の日課。

A.M. 6:30　Aufstehung〔起床〕、Psalm〔詩篇〕

Fleiß〔勉強〕

P.M. 4:00～5:30　Studium〔研究〕

P.M. 7:00～9:00　Deutsch〔独乙語〕

P.M. 9:00　Gebet〔祈り〕

P.M. 9:00～10:00　Bible〔聖書〕und Religiöse Bücher〔宗教書類〕

P.M. 10:00～10:30　Tagebuch〔日記〕(Brief〔手紙〕)

P.M. 10:30　Schlafengehen〔就床〕

○1925年8月19日（水）

晴。暫(しばら)く光を見ざりし天気。今日は Heller Morgen!〔快晴の朝〕である。

どうして僕はこんなに政美兄上と合うのであろう。生前、気が合う楽しき時はあった。しかしこれほどの深いところまでとは夢にも思わなかった。しかし兄弟にはたしかに合うところがある。それが本当に現われて来たのである。有難い。若し兄上、今地上に突然現われたとしたら、どんなに堅き厚き握手を以て僕は迎え、感謝し涙ながすことであろう。マーラナサ！　マーラナサ！　アーメン！　龍二兄上もかならず僕と共に感謝するであろう。龍二兄上に豊かなる恩恵あらんことを。僕と共に十字架の道を相携えて歩まんために恩寵あふれんことを。アーメン。

意識しつつ悪をなすほど背神なことはない。もし基督者にしてこれをなさば、彼の罪は最大である。不信の極みである。

午後2時頃、宣ちゃん戸田の帰りに寄る。3時半頃から泳ぐ。牛臥崎の方へも行く。跳込をする。相変わらずお出来の痕が宣ちゃんは一杯である。体質であろう。夜、沼津市の方へ散歩しに行く。千本浜へ行きたかったが暗すぎた。こんな散歩ならしない方がよかった位と僕には思われた。

四郎ちゃんも、宣ちゃんも、泰ちゃんも、ついに僕の真の友ではない。彼等はこの頃の学生風にやや感染していると思われる。一般の大学生風がうかがわれる。一般の高校生風がうかがわれる。帝大生何ぞ。高校生何ぞ。僕は全然別の道さえとりたいという気にもなる。法科大学生、医科大学生……とは何ぞ。文科大学生……とは何ぞ。彼等はあまりに道を失っている。一大学生を見て色々のその背景を察して益々失望（彼等に対する）と、己れが奮起

を示された。

我は彼等と何ぞ与するを得んや。我は恥辱、嫌厭を彼等から甘んじて受けて、なお安きこと限りなしである。彼等と与することほど身を危うするものはない。内村先生の歩みし跡が本当に慕わしくある。健全なる先生の道には許多の苦しみがおありであった。これこそ僕の慕いて慕う道である。

一人の人によって我が計画はややクルッタ。しかし書を読まないときに、不信者と共に一日をすごすときに、神は一層強く僕をまもってくださった。そして色々と教えて下さった。沼津市の電灯に酔う人よ、人の集まり行くところは虚栄、不浄の行われるところ。僕は帰途、天の星を独り仰ぎ瞻て、我が手をさしのべて彼等と握手したくあった。易らざる友よ、我は彼等を友として安きこと限りなし。

○1925年8月20日（木）

曇天。宣ちゃん、今朝帰る。僕は僕の心の限りの愛を以て彼に対したつもりである。彼等は相変わらずこの世の傲慢をまとうていた様である。何故、彼は優しい気持のよい心にならないのか。僕はそれがかなしくあった。彼に一言の礼の言がなかった。僕は礼を求めるのではない。ただ彼の心の暖かみなきを悲しんで、彼を送るやただちに二階で祈った。彼が一般の大学生、彼が一般の社交の人、彼が一般の紳士として終らんことをのみ悲しみおそる。

純正の基督教の何たるかを知らざる人よ、君達は如何に本当の人たらんとしても、それは得られないのである。僕は本当にそれが悲しい。亡び行く人々よ、霊魂の亡び行く人々よ。どうして地獄を慕い行く。汝等が慕わずと云うとも、汝等の言行は地獄をしたうと全然同じことをしているのである。

聖書と親しんでいるときに悪魔と会うと、僕は淋しみ苦しみを感ずる。と同時に絶大なる力が僕をとらえて決然と僕の心をして起たしめる。基督教は遁世生活のためでない。聖者然たる生活のためでない。飽くまでもこの世と戦うために在る。そして、

「汝等、雄々しかれ、我既に世に勝てり！」

の凱歌を既に我等が主の揚げ給いし歓びの戦である。この御声をききつつある我等は飽くまで信頼して戦う。我等は勝ちてあまりある。

大詩人、大哲学者、大政治家……すべての真の大の冠せられる人にして基督者ならざるものあるか。そは基督教のみが永遠の生命を与うるものだからである。

我は勤労、孜々として勉励せん。何ぞ彼等傲慢なる者共に負けんや。我に尽きざるの力あり。感謝の至りなり。

「凡そ神によりて生まるるものは世に勝つ。世に勝つ勝利は我等の信仰なり」

（ヨハネ第一５・４）

小学生、中学生、高校生、大学生、汝等は何のために学ぶ。試験の驚畏のため、肉のパンを得んがため、地位名誉財産のため、これらのいやしき要求に迫られざるときは遊ぶ、怠ける。これが汝等の勉強であるか。勉強することに一つの生命を見る能わず、あわれなるウジ虫のみ。

81〔139〕1うつりゆく世にも　かわらでたてる
　主の十字架にこそ　われはほこらめ。
　5わざわいさいわい　よしあしとも
　ただ十字架にこそ　きよくせらるれ。
261〔331〕1主にのみ十字架を　負わせまつり
　われ知らずがおに　あるべきかは。
　4この世の禍幸（まがさち）　いかにもあれ
　さかえのかむりは　十字架にあり。
301〔529〕2のこりなくみむねに　まかせたるこころに
　えもいわずたえなる　まぼろしを見るかな
　うたわでやあるべき　すくわれし身のさち
　たたえでやあるべき　みすくいのかしこさ。

アーメン。

今日（8月22日）、兄上の日誌。

「元始（はじめ）に神天地を創造（つくり）たまえり」（創世記1・1）

1919年1月1日～2月8日（第1巻）を拝読し終わり、万感胸に迫って、そぞろに涙が溢れるのであった。

人のために苦しみ、はたらき、祈られた兄上、己れのつとめに忠実なりし兄上。この神の子の真面目なる生涯をつくづくと思って、涙の中に僕もつよくされた。

今の世は、今の人は、今の老若男女は、今の学生は、あまりに不真面目である。あまりに物質文明に酔うている。あまりに虚栄、虚偽、淫蕩、貪婪（どんらん）である。彼等は良心に於て麻痺している。彼等はフワフワな塵か、グヅグヅなウジ虫である。

僕は全然相容れぬ。信と不信と何の関かあらんである。かく罵（ののし）るは罵るためにあらず、憎むにあらず、憂うるによりてなり。愛するによりてなり。当然、十字架は負わざるを得ざるのである。クリスチャンはこれ故に最も苦しき道を、自分でたのまれもしないのに選んでいる様なものである。自分で好みもしなければ人に頼まれもしない苦しい道。それがクリスチャンの道である。それなら誰がかくしたか、誰がではない。どなたがである。神様である。お父様である。お父様がこの道を歩めと聖霊により命じ給うが故に、僕は歩まざるを得ないのである。然らずんば僕は死であり、滅びであるからである。この外に理由は何もない。主の十字架の道、これを歩むのはただ彼を信ずるによってのみなし得ることで

ある。故に世の救われるか救われぬか、そんなことは僕の知ったことでない。恐らく僕の力では、世は救われないのである。正しく然りである。僕の生涯は失敗である。どんなにあせったって失敗である。失敗であって所謂世の成功以上の失敗であるから不思議である。最も強き人のための生涯、最も強き自分の義務に忠実なる生涯は、単に人のため、つとめのためと云う目的からは来らない。それは神のため、キリストのためからのみ来る。讃むべきかな神の栄光、神の聖業。マーラナサ！〔主よ来たりたまえ〕アーメン。

ああ、クリスチャン・ライフとは是のことであって外の何ものでもない。アーメン。

沼津の感謝なる20日がすごされた。我が神、我がお父様、本当に有難く感謝し奉ります。僕はこれよりほかに言を知りません。この20日間は本当に主の御懐に抱かれて恩恵豊かな生活をさせていただきました。主はこれを僕の生涯の一段階となし給いまして、益々御導き下さることと本当に感謝し奉ります。私の主によりて新たに生まれた日からすでに3年半を経ました。その間、或は近づき或は離れ、而もだんだん御光に浴するに至り、ついに永遠に主を慕う身と定め給いしこの恩恵、本当に感謝の極みでございます。アーメン。

願わくは、兄が主にすがりて主の道を歩みました如く、しっかりと僕をも歩ましめ給え。多くの祈りたきこと、感謝したきことございますが、深き黙祷の中に聴こしめし給え。アーメン。貴き主イエス・キリストの御名によりて聴き上げ給え。アーメン。

本は予定通りには読めなかったけれども、僕としてはかなり読んだ。水泳はクロール200mは続くこと確実となり、跳込は2丈〔約6m〕位の高さから恐ろしくなくなった。とにかく水に強くなったことは、忍耐力の養成にもよかったことである。躯は小なりといえども健康体であることはたしかである。感謝なことである。黒ん坊にもなって皮膚が強くなり、風邪には負けない身体となった。久しぶりの海浜生活、昔の片瀬と今日の沼津、別な意味に於て感謝の二夏である。

読書。ヒルティー先生の言われる様に、規則正しく読書することは必要である。それが習慣となってはじめて本当になる。僕の様に読書の速からざるものは、勉めて読みて速度を増せしめねばならない。精力集中、短時間に比較的大量を読むこと、多忙なるべき生活に必要である。

沼津最後の水泳。午後、最後の泳ぎをなす。牛臥崎まで往復、約10町〔約1090m〕、三島館前の跳込台がターニングで、跳込むことがその示し（シルシ）であった。帰途は風と波とに逆らって苦しかった。クロールと早抜手でぶっとーした。この元気があれば勉強も大丈夫。これからあと20日間の休暇3分の1あるわけである。最後3分の1が大切である。人間は終りを全うしなくてはならぬ。普通の夏なら、終りの10日間は何となく「おちつかない」とか「休みの様な気がしない」とか云うことを普通の会話にのぼするのであろうが、僕は最早そんなことを思うにはあまりに真剣である。クリスチャンにそんな考えはなくなって行く。彼は一日一日が主によりて楽しくある。本当に！　信頼と忠実な一日一日が楽しく

ある。故に夏休みのあとの20日も自分に自由なだけ意義ある楽しきものである。益々努力するつもりである。ああ、愉快なるは基督者の人生である。我が神、我が主は限りなく讃むべきかな！　讃美と感謝にあふれて行きし兄上よ、待てよ、私もまた従いて讃美と感謝に溢れて聖国に上らん。ああ、その日のいかに待たるるよ。

食前の祈り。食前にさえ感謝の祈りなど夢にも思わざる人々よ、汝等は真の歓び、真の感謝を知らざるにあらずや、それは人生にて最も淋しきことではないのか。すべてはあまりに傲慢なところから発している。故に罪の何たるかを知らない。これ最大のあやまりである。僕が食前に祈ることを親類のすべての人が知っている。君達、皆様は、これは何であるとお思いですか。基督者の形式ですか、虚栄ですか、偽善ですか、笑うべきことですか、変なことですか、無意味なことですか、馬鹿げたことですか、迷信ですか、何だとお思いですか。

僕は真剣なのであります。僕はなさざるを得ざるが故に祈るのであります。日々糧を与えて下さる神様がなくて、我々は生きて行けますか。その見えざる偉大なる愛を皆様は御覧にならないのですか。人はそんなに傲慢に創られたものでありますか。人は自分で生まれたものでありますか。神様の命がなくて一事もなすあたわざる人ではないのですか。

私は、傲慢になり行く文明人の心が悲しくあります。美わしきはずの人生は浮薄に、醜に不義に、すべての悪にともなわれて参ります。それは傲慢の小さな印からすべて生じて参ります。すべてが経済的に解されて行く世は終りに近くあります。経済と云い、政治と云い、法律と云い、その真の根底の意義、根本たるものがすべて失われているのが今のそれらであります。食前の祈りが真に行われるかどうかで、こんな小さな様なことでさえ人の心如何、社会如何をうがい得るのであります。

神様！　僕の夜の9時のお祈りのときに、どなたか一緒に共に神様に祈られる方が親類に出来ないものでありましょうか。神様！　基督者は――真の（おゆるし下さい）――本当に世に少なくあります。僕は人々を相手にしません。人々のために祈りましょう。彼等の救われる時は神様（オトウサマ）がよくして下さいましょう。その時を待つばかりであります。どうか彼等を御光に浴せしめ、めさましめ給え。心からお願い申し上げます。アーメン。

夕方、散歩。独りで浜辺に行く。金星と木星か、二つの星がキラキラと南と西に輝いている。漁船が帰って来る。漁火がユラユラしている。波が風にささやいている。天と海と、眼界はひろくひろく限りがない。これが僕の家である。全く彼等の中に心を入れてしまった。暫し黙然。讃（ウタ）い出したのは独乙語の讃美歌である。しずかにひくく。そして祈りに陥った。7時半全く暗くなって、汀を立ち去った。

○1925年8月21日（金）

快晴。起床6時15分前、先ず浜へ行く。静かに静かに海は笑んでいる。波は僕を笑って送っ

てくれる如くである。朝暉をうけて伊豆の山が光る。愛すべき自然を凝視して祈り、去る。最後の一瞥！　来るべき年、我は汝と再び歓びの眼を以て語らん。

米彦別館を去る、9時25分前。おばあさんに名残おしき別れ、すべての宿の人に快き別れ。彼等すべてに恩恵あらんことを。皆、労働に喜びて生きんことを。アーメン。

これくらい気持のよい旅館はめったにない。女中に2円、宿に2円おいた。一日は2円20銭である。宣ちゃんのはもう宣ちゃんからもらわぬことにした。11日～21日、22円40銭。なお20円を余す。居たいことは山々であったが、いつまで泳いでもあきないことを知って居り、一つには経済上、更に深い一つのことがある。それは、母上、兄上のことを思うと、あまりかかる地に居られなくなるのである。願うことなら、25日くらいまで居て、もっと自然と親しみ、もっと独りの生活をなし、もっと本が読みたかったが。また一つには、斎藤様がお呼び下さいましたから、国府津に行くことにしたのである。

正12時、国府津駅着。フト見ると海がすぐそこである。行って見た。急に泳ぎたくなった。その雄大な海辺に眼が冴えて心が大きくなった。太平洋なる哉！と思った。蓼々たる波の音に、本当に大洋の感をそそられた。まず波に巻かれたのに驚いた。次に勇敢に波をくぐった。やや沖に出た。山なす波とはこのこと。山が動いてくる。すると自分が山の上に乗る。またフワーッとさがる。驚くべき大きな揺籃である。愉快々々、またやや驚異であった。とにかく驚くべき海であった。写真を撮る。

沼津の海は女性的の海である。国府津のは正に男性的である。本当にいい対称と思った伊豆半島の東と西。2時半頃、岡なる大島様の別荘に着く。斎藤様お留守、箱根行。晩まで独り、静かであった。富士を西に、国府津の海を南に、小田原の辺まで一眸の中にある。鉄道は手にとる様に。汽車は玩具の様に。かの波の音は蓼々として響く。

夜、星が出る。満天銀砂をちらしたる如く。木星の光がことにあざやかである。夜10時半消灯。昨日来れば、今日は箱根へ行けたろう。自分一人で行って見ようと思っている。頭のためにはかかる高いところがよい様である。海はもうあきらめようかしら!?　恐らくそうなろう。読書！　読書である。兄上の跡にしたがいて、しっかりと。願わくは、母上様にお恩恵あらんことを。アーメン。

○1925年8月22日（土）

快晴。かの日の1か月前。昨日も今日も快晴。沼津の海はさぞステキだろう。しかし恵まれたる20日間に感謝する。汝は慾にまけてはならぬ。汝は感情に動かされてはならぬ。最も静かに聖旨に従いつつ。あと1か月で「かのよき日」から4年になる。

Vergangenne 4Jahre〔過去4年〕。思い見よ、その日を。思い見よ、今日を。4年！

4年！　涙！　感涙！　感謝！　歓喜！　希望！　奮起！

4年！　入学試験勉強あり！　1922年正月あり。入学試験あり、合格あり、水戸行

きあり。第1学年第1学期あり、病あり、入院あり、退院あり、静養の秋あり。
正月あり（１９２３年）、目白転居あり。兄上結婚あり。3月来れり、大手町あり！　イースターあり！　第2回目第1学年第1学期あり、夏あり、沓掛行あり！　地震あり！　第2学期あり。
正月あり（１９２４年）。第3学期あり。第2学年第1学期あり、病あり、休学1学期あり、夏あり、赤倉あり！　まま様召されたり（8月2日）！　第2学期あり、大火傷あり、第2学期、チフス騒ぎあり。
正月あり（１９２５年）。第2学期試験あり、瘭疽（ひょうそ）あり！　第3学期終る。第3学年始まる。第1学期終る。夏来れり、沼津の20日あり。
過去4年は明らかに前眼に展開されて来る。暗あり、光あり。光は次第に暗を呑み来れり。光は竟に闇に征服さるべきものに非ず。幸なる哉、感謝する哉、讃むべき哉、我が主よ。
独乙語、英語、グングンやれ、うんと力をつけろ。それだけが最大の急務。泳ぎはまた来年の楽しみ。午後1時半頃、うらの瀧で、叔母様（キミコサマ）、レン子さん、アイ子さん、なつ子さんの写真。午後2時より、裏の山に登る。斎藤の叔父様と外5人で。
雄大なる眺望。人々よ、自然を眺めよ。自然を通して見るべきものを見よ。ああ、知る人ぞ知る。
房総半島、三浦半島、江ノ島、大島、城ヶ島、片瀬、大磯、武蔵野を南東、東、東北に瞻（み）、伊豆半島、天城山、二子山、小田原方面、富士山麓を南西、西、西北に瞻る。南は渺茫（びょうぼう）たる太平洋。その雄大なる眺望に、下山する能わず30分余りとどまりてながめたり。眼に映ずる如く写真にうつせたらどんなによいかと思った。酒匂（さかわ）川、馬入（ばにゅう）川の濁流で近海が褐色を呈していた。下山、途中で国府津市街とその海浜をカメラに入れた。4時すこしすぎおりつく。入浴、夕食、散歩。意外に時間を費やし、読書は8時から。海はもう来年のお楽しみと云うことにした。沼津よ、恋しき沼津よ、汝は来年の僕を待ってくれよ。
沼津よ、沼津よ、よく汝は僕を守ってくれた。20日間は本当に汝によって豊かに恵まれた。汝は、はじめの僕の願いの通り、よく泣き、雄々しく怒り、雄々しく歓んでくれた。なつかしき汝よ、我は云うところを知らざれど、ただ汝に感謝することのみを知る。感謝す汝に。汝はまた外の霊魂を僕に於ける如く慰めよ。ただそれを祈る。美わしき天然と美わしき聖書とそれは真の僕の伴侶であった。さらば沼津よ、来る年まで。我は汝によって得たる、光と力とによりて、奮戦努力して神の栄光のためにはたらかん、息（いこ）いのときまで。アーメン。
小さい人々（石井さんの二人、レン子さん）に白瓜の提灯（ちょうちん）を作ってあげる。皆大よろこび。暗い月なき夜にはいい提灯である。風流である。〔白瓜の果肉をくり抜いた中にローソクを灯した提灯のスケッチあり〕
飛行機、将にモスコー〔モスクワ〕に着きなんとす。成功せんことを。嘉代子様にお恵豊かならんことを。富山にも。母上、平口様に願わくは深き信仰を。アーメン。

もし自分が国府津にて楽な生活をするためならば、自分は慙死すべきなり。自分に義務あり。励めよ。十字架の道を歩めよ。十字架は遂に我が心をさるあたわず。夜は聖なる北十字を天上にのぞむ。波の音、下界の電燈の光、汽車のイルミネイション、それを瞰下し、天上の光に聖なる思を寄せて。

○1925年8月23日（日）

快晴。起床6時半、朝の山気はよい。小田原、伊豆、箱根の遠望、絵の如し。午前、ルカ伝。ヒルティー“Über des Lesen”〔読書について〕読了。学校で約1年、実吉、小牧先生にならって前半を読み、後半はこの夏からボツボツ読んで今日読了。120頁のヒルティーの論文である。いつか、“Glück”〔幸福論〕を読みたいものである。

午後、午睡せんとせしに、人にさそわれ、食後30分の後、海に行く。波にもまれて、好い運動、男性的の海もまた快であるが、やや凄みがあって沖に出ることはよした。4時15分帰宅。海岸まで20分ばかり。帰宅は、お芋と西瓜の御馳走。夕食後、読書せんとすれば、小さい人々（あい子、なつ子、れん子さん）に抱きつかれて、振りはなして読書も可愛そうと思ったので、皆を相手に無邪気にあそぶ。碁石でゼニ廻しをした。叔父さん、叔母さん、なつ子さん（5つ）、きく（女中）が敵、こっちは僕、れん子さん、あい子さん、うめ（女中）というわけ。さしひき11差20点になるまでを以て1勝負の間となし、2回やり2回ともこっちの勝利。なつ子さん（西郷さんという綽名）――男に生まれるべきだったと笑われるかわりもの――はなかなか痛快居士である。しかし、シッカリしている。あまりからかっては可愛そうである。

8時半からダンテ、日記、聖書。9時のお祈りは切になされた。僕は飽くまで霊的生涯を放れて生きることは出来ない。これは全く真理となった。感謝すべき哉、我が天の愛するお父様。

政治を談ずる人よ、星の研究をなさいませんか。傲慢は自ずから消えて行きはしないでしょうか。法科大学生よ、一輪の花を採って御覧にならんか。そこにあなたがたは神の業を御覧になる眼を有ちませんか。家に働く女の方々よ、あなた方は新聞雑誌を読む時間がおありでしたら、マタイ伝を繙いてごらんになりませんか。小さい人々よ、歌を歌うのなら、神を讃美する美しいのをお歌いになりませんか。

謙遜と云いて、ただヘリクダッテいることではない。心の中から本当に神様を思い、感謝の心を以てすべてを見て行くことが出来る様になれば、自然とあなた方は美しくなるのであります。美しいとは、ただ外観のことでありません。内なる心の発露の言いがたき美であります。この美は外的美のすべてを征服する美でありますから、外観は全然問題でありません。必ずしも礼儀作法を必要としません。言のあやを必要としません。僕はただこの一事のためにのみ万人のために祈る。この外に何にもない。ことは至極単純である。しかしてこの単純なる一事がすべての根本なる故に最重要なのである。故にこの一事をのみ

憂い、この事のためにのみ祈る。

神を知り、己れを知るはただキリスト、イエスによりてのみ。キリスト・イエスを仰ぎ瞻ること、万事はここより。アーメン。マーラナサ！　アーメン。暑き東京に居給う母上をあわれみ給え。健康を快復せしめ給いてよ。アーメン。

苦熱とたたかいて働く人あり。苦熱をさけて別荘とやらにいる我あり。ああ、我が身、かくあるべきか。常に心に十字架を忘るること勿れ。汝、準備の今、貴き時を忘るるなかれ。励めよ、勉めよ。汝にあたえられたる今はやがて働かんためなり。身体も鍛えよ、読書もせよ。しかし身体、身体と云うなかれ。これはむしろ思うべからず。

「汝、先ず神の国と義とを求むべし」

なるが故に。

○1925年8月24日（月）

快晴。20日以来、天候本復、毎日照りつける本当の夏の日ばかり。東京はさぞ暑いであろう。それにつけても、母上様のために祈り奉らざるを得ない。

午前6時、「辰雄さん！　お起きなさい、釣に行きましょう！」と云う元気のよい声が枕辺にした。疑もなく斎藤叔父様の声である。「ハイ！」と云ってとび起きた。「いい天気だなあ！」と云った。朝食後直ちに海岸に行く。漁師が、「今日は波が荒くて船が出せない」と云う。ひとまず形勢傍観とすることになり、浜に30分位居た。どうやら出せそうなので再びたのんで乗り出すことにした。「沖は大丈夫ですが、船を出すときと揚げるときが危ない」と云う。勇敢に乗り出した。幸い波の小さい周期的のときにぶつかりうまく乗り出た。船頭2人、僕と叔父様と若い人1人、計5人と云うわけ。僕は初めてである。船には強い自信があったから何でもなかった。かなり乗り出した。船は相当ゆれた。

“The more waves dashed the more fun it was for Frank” の National Reader2 の一句を思い出して、自分の今の気分を解し出しておかしかった。

海深30尋位（ひろ）〔約54m〕と云う。その深いのに驚いた。釣糸は手が痛くなるほど繰られる。なかなか釣れない。今日はすこし濁っているというのでなおさら。アジ、ワカナゴ、○○○が合計6匹。午前9時半～1時までに釣れた。波も荒くなりそう。魚の釣れそうにないと云うので、引き上げることにした。雲なきみ空の太陽は特別である。カンカン照らされて軽い日射病と云うわけで、僕が先ず気持がわるくなって、少し寝ていた。その中に叔父様も気持が変になられた。毒であった。一辺、沖で泳げば予防できたかも知れない。揚げるときは飛び込んだ。そして岸まで泳いだ。いい経験をした。面白かった。有難かった。ただかわいそうなのは釣られた魚である。釣を本当に釣りたい意志は僕にはない。だから、生きものの死にたてをぶらさげて帰るのは少なくともいい気持はしなかった。帰途、西瓜を買って帰る。肩にかついでエンヤと。

斎藤さんは、恬淡で男らしいから好きである。敬する。今の金にきたない、変な奴の多い世間を見えられている所為か、本当に気持がいい。贅沢、豪奢、無法、浪費では勿論ない。しかし、心はよくその動作にうつっているからキレイなところがわかる。

モスコー着の夕刊。万歳！である。よく飛んだ。堅忍、自重、真勇と云うべきである。その難、思うべしである。喜ぶと共にその難を察する。日本男児の勇気を見ずや、である。空の勇士の如く、我等もまた各方面の勇士として世界的ならざるべからず。

僕の理想は、パウロの如く信仰の勇士たるに在る。最難事である。最重大事である。故に為さんと志す。最も欲しきものは正にこれである。日本の最も欠乏せるものは何ぞ。金にも鉄にも銀にも銅にも非ず。化学工業品にあらず。大政治家なり、大詩人なり、大宗教家なり、大音楽家なり。真の大、即ち人なり。人が無いんである。人多き人の中にも人ぞなき人となれ人、と古聖の呼びし声は古くあらず、新しき新しき問題である。故に僕は人になりたいのである。

三弦さん、御病気御入院の由。お孝さん、腎臓炎の由。二人とも水戸にて。また吉原の敬さん、再び入院の由。これ憂うる次第である。本当に可愛そうである。吉原の叔母様もお気の毒である。三人のため祈りまつる。三弦さん、聖旨を静かにうかがわれんことを。病の何たるかを知り、神様を仰ぐことの始まらんことを祈りまつる。お孝さんを、忠実なお孝さんを、神よ、聖旨ならば一日も早く癒し給え。彼女は行と心にて純なれば神の子なるが故に。

十字架の道。ああ、毎日、真に神を思い、キリストを仰ぎ、十字架を忘るることなく暮らす人は幾人であろうか。人生の善はすべてこの中にある。幸福この中にあり。平安あり、歓びあり。このことを知らざる人は、本当にかわいそうであると思う。人生の真の幸福、それが十字架の許にあると聞いては、多くの人は皆逃げ避けるであろう。故に彼等は皆真の平安を知らないのである。福音の道もまた難き哉である。知る人ぞ知る、其の易き所以、その難き所以を。

昨夜、嘉代子様と親しくお話をした夢を見た。切にお祈りしたので、神様が歓ばしき夢を下さったものと信ず。鴻子まま様と政美兄上との信仰の聖なる交、また、嘉代子様と僕との上にあらんことを。天の御二人は嘸、およろこびの御事であろう。アーメン。

暇があったら読書するか、最もいい休息なる睡眠をとるか、場所があったら祈るか、静かに考えよ。僕の慰は、活動写真でも、芝居でも、ヨセでも何でもない。僕の慰は、聖なる書かそれによりて出でたる書類である。

過去20年はよく遊んで、よく怠けた。その中にさえいいものがあった。それは全く母上と政美兄上のお蔭であった。これからは自分の信仰の生活である。全生涯、感謝！感謝！である。

夕刊、第1頁、第2頁。歓びに満つ。航程1万キロ世界を半周し、訪欧機モスコーに安着す（8月23日午後5時5分着）。欧亜征空の壮図ここに成り、世界的大記録を〇〇に印す（23日モスコー

特派員発）。

安辺、河内、篠原、片桐の四勇士。国民的に歓ぶべきこと。朝日新聞のみにあらず、他の新聞紙上に載することの僅かなる見て、日本人はまだまだと思わせられて再び憂いの霊である。魂丸の小さい奴が居る。

挙国一致だの、忠君愛国だのと口にする奴にかえって、碌（ろく）なのが居ないようだ。根のないものに花は咲かない。根本があれば、それは現わるべきときに現われる。なければそれだけ醜状暴露。真理は動かすべからず。真理にしたがうの最も賢明なるを知らざるウジ虫はあわれむべし。人の計、人の智は小なる哉。

〔飛行経路の地図のスケッチあり。東京発-450㎞-大阪-520-太刀洗-850-平壌-906-ハルピン-1350-チタ-800-イルクーツク-950-クラスノヤルスク-700-ノヴォニコラエ-1180-クルガン-1200-カザン-750㎞-モスコー着。距離総計9656㎞。その後の予定航路：モスコー発-ワルソー-プラーク-ブルッセル-ベルリン-ロンドン-パリ-ローマ。「『初風』『東風』の飛行時間表、東京よりモスコーまでの通計。初風66時間30分、東風67時間54分」という見出しの新聞記事の切抜き貼付あり〕

○1925年8月25日（火）

雨。Wenn man auf Gottes Wegen wandelt, so kommt für jeden Tag seine Kraft und seine Aufgabe von selber.〔もし神の道を歩んでいるなら、その力と課題はおのずと毎日やってくる〕

このことが体験的にわかって来た。この頃は本当に有難くある。昔の僕なら、なかなか今の努力は出来ない。今の努力は歓びあり。努力、苦痛に非ず。そは力が与えられるからである。不思議にしてありがたいのはこの力である。そしてAufgabe〔課題〕は一生尽きずに、歓ばしく来るであろう。それは皆、益あることであるからである。

今朝は未だ嘗（かつ）て見ざる幅広き濃き Regenbogen〔虹〕を見た。西方箱根に。

Christian〔基督者〕の勤勉は特別である。人はよくあんなにつづけて出来ると云う。しかし、Christian にはそれはさしたる苦痛、否、かえって面白くてたまらぬことである。勤勉の中に休息あるを人々は知らない。この休息こそ、Crist〔基督〕を仰がざるものにはわからぬ、不思議な休息である。Amen!〔アーメン〕

人間は閑静なところを時々このんで行くが、やっぱり人気がほしくなり、人が来るとよろこぶと云う。恐らくかく云う人々は多いであろうが、僕に於てはどうもそうでないらしい。自然と聖書とこの類の書を友としていれば平気でおもしろくあると思う。それは半年も居たら変になるだろうが。それでも、やれと云うならいくらでも平気であると信ず。

○1925年8月26日（水）

雨天。日本の児童は、日曜に何をするか。休暇に何をするか。両親、学校は何を彼等に

教えるか。ああ、禍なる哉、現代日本の教育よ。彼等に日曜学ぶべき聖書なし。休暇に自然を讃美し、神を讃美するの歌なし。彼等に生命の泉なきが故に、真の歓びなきは宜(うべ)なる哉。これに比べて聖書を手にして愛の家庭をつくることの如何に恵まれたる感謝なることよ。彼等に言うもわからず、彼等求むる心いでざればわからず、彼等不信の両親に育てらるる子供はかわいそうである。

日本の様な国にチャンとキリストを受ける様にするにはやはり児童よりするより仕方がない様である。純な心に聖書の物語はよい。されば、青年に於て信仰に入りたる私達少数のものは、真に聖書の何たるかを知るが故に、このことのためにどうしても働かねばならぬ使命をもたせられている。神様が之を賜いたりというより外に僕に解すべき心も頭もない。福音のためには、責めも恥も何かはあらん。十字架を仰ぎつつ信仰の戦を戦わん。アーメン。小さい人々の声を聞きつつ雨をながめながら。

読書デー。有難い。雨もたしかに恩恵である。基督者にとって恩恵ならざるものがあるかと、恩恵ならざりしものをさがしたい位である。すべては益あり。「有難い」ほかに言がない。“Lives of the Saints”〔聖人の生活〕S.Baring-Gould〔セイバイン・ベアリング＝グールド〕の January の S.Agnes〔聖アグネス〕の章を読んで涙が零れんばかりである。“I may be a child, but faith dwells not in years, but in the heart.”〔私は子供かもしれない。けれども、信仰は年齢にではなく心に住まうものです〕の彼女の Symphronius〔センプロニウス〕に答えた一語は正に Amen! である。S.Agnes 若き乙女にしてこの語、彼女の殉後、それは Christ our Lord〔私達の主キリスト〕在まし給わずしてなし得ようか。Love〔愛〕、Might〔力〕、すべて “He”〔彼〕より。Amen!

全16冊のこの蔵書、人に読まれずして、大島さんの別荘の裏の八畳の間の棚にあるを発見した僕は嘆じた。そして、読まないのなら僕に売ってくださいとさえ云いたくなった。1冊も Cut〔開封〕してないのに驚いた。

武田の叔母様の7月31日付の御手紙、母上が忘れて居られたため今日とどいた。有難く拝読した。僕を知って下さる方は母と叔母様だけかも知れない。僕はもっと僕を知って下さるために信仰の戦を戦わねばならない。

僕がキリストに近ければ近いだけ、叔母様の僕を知られることは、叔母様のキリストへの道であるかも知れない。甚(はなは)だ不遜の語の様であるけれども、ゆるしていただきたい。人の誰たるを問わず、それは僕の使命なのであるから。僕はかく思うときに、僕は僕でないのである。僕はキリストの枝なのである。僕と云うものの存在を考えてはならない。僕が消えてキリストが現われなければならない。

母上様、どうも御身体がハッキリなさらない。お歯がわるいからである。それが原因で、コジレテ長引いて来たのである。この際、お歯をお治しになるのが第一のことでないかしら。この秋と言わないで、今からなされるのがよくはないかと思う。僕も歯の治療をしなけれ

ばならない。金充填がとれた。この間、呑んでしまうところであった。有難くあった。

あやつり、はかりごとを用いて暮らす、政治家、銀行、会社員、官吏といった人々は、人の上に在って、うまくやって行くことを以て快事、大事となしているのかしら。空の空なるは彼等の人生、傲慢は彼等の徳、あわれむべきカラッポ、と云いたくなる。かくて、弱者（貧者、下位者）に味方せんとすれば、彼等もまた卑猥な楽しみを以て満足して暮らす。上、下、共に乱れたる空なる世なる哉。

ここに少数の真面目な人は立たねばならぬ。しかしてこの少数な人は基督者であらねばならぬ。しかして、彼等のなすことは、この世にて失敗であることは明白である。この世で成功すればかえって失敗であるからである。キリストの国はこの世のすべてと相容れない。キリストの国は、毎日々々を感謝の中に、毎日々々を愛の中に、毎日々々を忠実に送る人にのみよってやがてたてられるのである。そしてそれは今からできつつある。地上に在りつつある。

『改造』8月号、河合栄治郎氏の「在欧通信」は面白かった、有益であった。僕の心にピカッと来るものがあった。然り！と云うものがあった。彼は基督者でないかも知れぬ。しかし、しっかりした人であるらしい。一節に、

「大会（プリマウス）は恒例として、第一日に開催地の市長が……歓迎の辞で土地の有名な教会に於て祈祷会を開き……、第二日の会議に入るのである。……恰も日本大震災を報告し、以前の同盟国たる日本国民に対し、殊にその災害を最も多く受くべき下層階級の為に心から同情する旨を述べ、日本に電報を送ること、三分間の黙祷をなすことことを提議した。満場一斉に起立して、黙祷をした時には、列席したる自分は衷心其の同情に感謝したのであった。」

かかる場合が若し日本に起こったとしたら、日本人はかかる厳粛なことが出来るか。それは出来ない。宗教の有無がその根本に横たわっているからである。欧州の文明を入れた日本はそれと共に宗教を入れざりし故に、誠に奇型児である、変態である。土台なしであると云わざるを得ない。同時に僕を打ったものは最後に、

「英国は其の罪悪の時に常に自国を罵（ののし）る人を国内に持っていたことである。印度に対するエドモント・バーク、南亜に対するキャンベル・バンナーマン等を始めとして、自国の政府をまのあたりに難詰するものがあった。そうして一般民衆は之に与（くみ）すると否とを問わず、之を持つに敬意を以てしたのであった。一群の保守派のあるは必ずしも問題でない。強く之に戦う人のあることに、多望の未来が開かれる。更に此の声に耳傾くることを知る民衆のあることは、来らんとする流の方向を示すに足りないか。英人は悪に強いと共に、善に強い。……」

とあった。これである！と僕も思わせられた。日本人にこの雅量、この謹厳がない。それ故にすぐ、喧嘩、擾乱（じょうらん）、混沌と云うものを起こして、容易に進歩を見ないのである。それ

は何でもない。原因は国民の精神にある。即ち、教育の不完、更に源泉をさかのぼれば、宗教の無いことに帰してしまう。宗教心が子供のときから沁みこんでいる宗教国と、それのない国とは自ずからそこに大いに暗々裏に差を生じているのである。これは、どうしても宗教を根本的に植えつけるよりほかに道がない。基督教を外国人の宗教として避けるものは誰であるか。悲しい哉、日本国民全体である。故にいつまでたっても駄目なんである。基督教は東洋の宗教であり、世界の宗教である。これなくてはすべてが駄目なのである。かつて基督者がローマにて迫害されたる殉教の道を、僕たち極少数の真基督者はふまなければならない。十字架は僕の眼の前に明らかに示されている。僕は、血族、親戚、知友、すべての反対、嫌厭（けんえん）、侮蔑を甘受するに一歩も躊躇（ちゅうちょ）せぬ。僕は起つ。あくまで日本民族の救われんために。愛と義のために。小さい針は僕を大きな僕の目的にまで刺激してくれる。かくして僕は日々を日本国民のために、思い、準備をなす。

神よ、願わくは、しばらく僕を地上に置きて働かしめ給え。神（アナタ）のために働く精力体力を与え給え。私、小なるものでございますが、かくアナタに選んでいただきました上は、どんなことがあろうとも、アナタのために働かざるを得ないのであります。アナタの智、アナタの力を願わくは与え給いて十分にはたらかしめ給え。私のお願いし奉ることはこの一事を措いてないのであります。願わくは、人のために働きて聖国に映されし多くの聖徒のきよき跡をふましめ給え。切なるこの願い、救主イエス・キリストの貴き御名を通して聞（きこ）し召し給え。アーメン。午後5時20分。光あり、我に告ぐ。感謝。

斎藤さん、郁雄さんと三人でTwo-Ten-Jack〔ツーテンジャック〕をやる。第1回（9回戦）は大勝。第2回（6回戦）大敗。夕食後、停電、読書出来ず、残念。已むを得ずしてトランプを再びした。今度はマンナカ。ついに点かず、9時すこしすぎ、就床。

祈る時間を、人とのおつきあいのためどうしても、2、3分しかとれなかったことは僕に辛いことであった。食前のお祈りは、先ず自分の室でしてからにして、略さざるを得ないのである。基督者が居なくて辛くある。しかし、主キリストの愛は、この時にこそはたらかなければならない。

英人は、読書と信仰と実行とを一つに考えていると書いてあった。立派な教育の産むところであると、彼等の幸のためによろこび、且つ羨ましくもあった。日本人は、雑薄である。口バカリである。真剣味が足りない。どうみても英人のこの特性は一段上である。Gentlemanly〔紳士らしい〕なるところもかかることから発しているのである。

朝起きて先ず新聞を読む国民と、先ず聖書を繙き祈る国民とはどちらが人であるか。これを前者なりと云うものはどこにもあるまい。かかる自明の悪を見ながら、出来ないのが日本人、即ち無宗教な国民である。随分、日本をけなし、英国を讃めた様である。しかし英国を特に賞めたのではない。どこにも悪はある。しかし根本のしっかりしたもののない日本が心配でたまらないから、僕はあくまで自国を罵る。僕は外国にかぶれて、日本をの

のしるのでない。外国は外国、日本は日本。日本は大事な使命を有する国。どこまでも善き日本である。然るが故に日本を罵る。すべて愛の心より。僕は日本を愛する極少数の鋭き刺の一つである。かつてカーライルが英国にありし如く。

高校3年生のくせに、随分思い切ったことを言う様であるが、これはどうもやせがまんやからげんきで言うているのではない。これは信仰の二字の許に言い得る真実の言である。

主よ、母上様のため、豊かに御恵をたれ給わんことを。アーメン。

○1925年8月27日（木）

昨日は終日、徹底して降雨。瀧の水、濁り、滔々として流れていた。今朝は、特に澄み渡って富士も天城もクッキリと輪郭を空に描いている。水も清くなっている。

午前、読書。午後、ひるね、散歩。自転車、酒匂川行。地引きを見る。漁夫の生活を見て、海に親しみ、海と別れるそのライフの単純を思わせられた。郁雄さん帰京。西瓜を食べる。入浴。半月が実によかった。澄み渡れる雨後の空は何とも云えない。斎藤様御夫婦と、暫くお月見をなした。

色々の話が出た。宇宙の不可思議、万物万事の空、遂に人生の何たるかはわからない様であった。全然、無信論者の如く僕には思われた。僕はここに敢えて斎藤様を論敵として書こうとはしない。しかし一般無信の者に向かって云う。宇宙が不可解と云う。人生が空であると云う。宇宙に対してかく人智の小をさとり、人生に対してかく無意義、無生命を云うならば、何故に更に大なるものが信じられないのであるか。何故に道徳によって生活して行こうとするのであるか。空ならば勝手なことをするがよいと云ってもあやまりではないではないか。更に僕は論をすすめようとしてか、一般の無神者はあまりに浅薄であり、人生に対して真剣味なく、くるしまないのを洞察する故に、更に矛を向けるさえ無駄な様である。彼等は己れの罪に泣けない。己れの弱きを知り得ない。死の問題に真剣でない。律法の問題に真剣でない。即ち、ナマヌルのワケのワカラヌものが彼等である。

人生はそんなものであるか。宇宙はただのOrgan〔機関〕にすぎない無生命のものであるか。無生命のものの中に生きている人間があるのであるか。かかる霊を宿す人間があり得るか。かかる霊を有する人間が創られた宇宙に之を支配するものなくて人間の霊は安んずるところがないではないか。

人間は竟にくるしみなやみて死するものか。快楽をむさぼりて地上の生をたのしむ人間が真の強者、勝利者で、死を永生を考える真面目な罪人が敗残の者となりおわるのが人生であるか。

しかれども見よ、事実を見よ。悪者（アクシャ）は地上に快楽を趁（お）うて満足したることなし。死にのぞみてよろこびしことなし。皆、嘆息の外、発せざるを。しかるに事実を見よ。人生を真面目にくるしみて送りしもの、その苦しみの中に真の幸福、歓喜あり、希望あり、而して

死に会するや、歓喜と希望に満ちて行く。これ真正の基督者。最大の勝利者であることを。人生の事実は、歴史は証明す。しかして、吾人の体験も之を証す。キリストを神と信ぜざるものに之は竟に臨まざるなり。人生は空にあらず。

道徳、哲学、しかしてあらゆる宗教（実は真の宗教に非ず）の上に立つ基督教こそ人生の空にあらず。歓喜、感謝、讃美なることを実証す。キリストを知ると知らざるとは生と死なり。科学の発達如何にもあれ、社会、世界の変動如何にもあれ、動かすべからざる基督の聖国は永遠に建ちてあり。真の信徒は絶対に絶ゆることなし。しかして主、再臨の時こと我等が歓喜は実現さる。万物、神を讃美するに至らんとす。

之を信ずるあたわざる多くの人よ、我は断言す、汝等は禍なる哉！　すべての迫害も尽く、我にはあまりに力なきものなり。汝等いかに我が肉をさき血をしぼるとも、我がこの確信を寸毫もゆるむことあたわず。かえって、我等は禍なる哉！との我が叫びを大ならしむるのみなり。滅び行く汝等を見るに忍びずして、祈り、苦しむ我が心を知らずや。神はなげき給うのであることと汝等は知らざるか。

私は人を愛するのあまり、かく苦しむのである。私は罪に泣いた。十字架を仰いだ。救われた。きよめには達していないかも知れない。しかし私の信仰の生活はたしかに私をキヨメに向かって運びつつある。感謝なる日々はかく送れている。

主イエス・キリストに従いて十字架を負いて、私は人のために苦しむ。これは神様が私に命じ給うたことである。私は「何のため」と云うので、人のためにするのではない。私は――言うならば――神様の栄光のために働くのみである。それが人のためと云うことになるのである。何となれば、多くの人は迷いに居り、亡びに行くからである。それは神様の聖旨でないのである。

世界の人よ、何故皆が自分自身に真剣にならないのか。世界の平和も幸福も歓喜もすべては自分自身の一つ一つの小さな霊の純真にかえることによってのみ来る。心が誠に帰ることによってのみ帰る。罪になくことが第一歩である。人、その罪に泣くに及んで初めて全世界に神の聖旨はなるに至る。人が自ら迷いにある間、自ら自らをすてるのである。

神よ、願わくは人をして罪に泣き神に帰らしめ給え。ああ、天のお父様よ、願わくはこの切なるねがいを聞き入れ給え。主キリストの御名により。アーメン。

斎藤様の人格、敬服するものあり。御親切有難きものあり。ただ僕は信仰の一事に立ち帰りて真剣になるときに、斎藤さんも、総理大臣も、…博士も、…学士も、すべてのこの世のいかめしきものは僕の眼中にないのである。すべてあわれむべき人の子である。皆同じ人の子である。鋭き罰はダンテの地獄の如くかえられるであろう。

この信仰の力とはそもそも何であるか。人の力にあらず、神より与えられたる神の力なり。それ故に、すべての人の力に勝ちてあまりあり。

良き斎藤さん御夫婦のために祈る。ああしかし信仰の与えられる日は何日（いつ）になるかを知

らず。神のみ知り給う。かなしくある。しかし待つ。百年も二百年も。
基督者の苦しみは絶えぬ。しかし貴い苦しみである。主の十字架が之に耐える。故に感謝である。この苦しみの祈り、苦しみ、すべていつか父なる神はきき入れ給うことを信ず。故に万事歓ばしくある。
栄光、世々限りなく神にあれ。救主イエス・キリストの御名により。アーメン。
日記、１９２２年10月10日から１９２５年８月27日まで、第７巻１０００頁に達す。僕の讃美の声、感謝の祈、歓喜の声、祈祷がつづく限り、この日記は絶えることはないであろう。神よ、願わくは益々、神の御光の道へ導き給え。アーメン。
――１９２５年８月27日夜11時10分前、水車の音、渓川の音を聞きつつ擱筆。

○１９２５年８月28日（金）

午前４時半、起床。斎藤様の皆で浜に行く。暁（あかつき）に星をいただいて家を出たわけである。オリオン、プレイアデスが暁天にあわき影をはこんでいる。ジビキを手伝う。その中に朝日がのぼって来た。水平線上より、その瞬間を写真にうつした。イボダイ、カマス、アジが網に入って居た。溌剌としてはねていたが、皆これからマヒルのかと思ったときに或る感に打たれて、独りよい気持はしなかった。何故？馬鹿！と人は言うだろうが、僕は何故とも言わない。それはあるものによってである。語るは愚。彼等にわからず。我は言わん、敢えて、詩人の心は詩人に非ずんば解し得ずと。あみを引くのとこの心とは一致せず矛盾している。しかしそれでもよい。
不図、思いたって、舟を出すことになり、朝食を海岸で停車場の「タイメシ」ですませた。面白い爺さんと男らしいキビキビした船頭と二人、つまり四人で出た。ときに６時。ナガシ釣をした。こんなことは初めて。第一に海ウナギ、第二に海蛇、第三に海ウナギ、なにしろお魚を釣ろうと思って来たのに、お魚がつれるどころか、怪物ばかりで驚いた。蛇には全く驚いた。海蛇３匹、海ウナギ５匹、ハモ７匹、アマダイ１匹、カサゴ７、８匹、サメの子３匹、メダイ５匹、ハタ１匹。これが今日の珍物獲物。雨後の濁れに夜昼をとりちがえて、深海の魚がやって来たと云う。普段はこんな魚はとれないと云う。全く驚いた。まだあった。それはワタウナギと云うきみのわるい奴。漕いだり、泳いだりの方が面白かったかも知れない。とにかく、釣ったり泳いだり漕いだりで実に愉快な半日だった。ことにお爺さんとの対話が面白かった。
12時、引き上げ。帰って入浴。お昼が１時半、ひるね、読書少許。夕食、６時半。休息、お月見、雑談。また人生のことに及んで、斎藤さん曰く、「人生なんて一体、くだらぬ無意味なもんだ」。さて僕は之に答えんとすれば、実に多くの異論を有して尽きないであろうけれども、僕は之に応ずることをやめたのである。斎藤様はそれは信仰から云えば全然零で、やはりあわれむべき人の一人であるが、しかし、実行の上から見て、とにかく立派なしっ

かりした方であるから、それで敬する。斎藤さんの人格をどうのこうのと云いたくはない。また云う資格を有しない。

信仰なき人の言としてはこれは誰人も帰するところであろう。信仰を低く見て、これは人生を美しくし、歓ばしくし、感謝なるものにする一手段であるから、信仰をお有ちなさいとさえ、かかる人々には言いたくなる。何となれば、彼等は信仰を有つには余りに不信であるからである。信仰は飽くまで真剣なるを要す。もう僕は今日、之について言うまい。ただ僕がかかる人の言を聞く毎に、信仰の貴きこと、彼等に福音を伝えたきことを切に感ぜしめられるのが幸である。僕はいよいよ準備をする。神の立派な戦士たるために。そしてこれは日々戦われつつある。

斎藤さんは自立、自主な人である。自己の信ずる正たるものに対して非常に強い。「自己の信ずる正」が如何なるものであるかは大いに論ずる余地があるが、之を略す。それが説明は自分によくわかっている。

もうよい、万事はよい、わかった。世の人の心もわかった。それはもう問題でない。問題は、神とキリストと福音と信仰とである。人生に之を措いて実は問題はないのである。僕はこのことのために全生涯を之が証となさん。神よ、願わくは、我がこの小さき身体を使い給いて、神の聖業のあかしをなさしめ給え。栄光をあらわし給え。アーメン。

○1925年8月29日（土）

ケーベル先生がヒルティー先生の Glück〔幸福論〕について、

「私はこの書の中に私自身を発見した。且つそれは同精神を有する現代の傑（すぐ）れたる一人格によって私の諸信念を強固にし、心の落着きと鼓舞とを与えてくれたのである」

と云われた語は僭越（せんえつ）ながらも、僕もヒルティー先生の Für Schlaflose Nächte〔眠られぬ夜のために〕（1月31日、4月19日）について言ってよいと思う。またそれ以上に、この書は僕の友である。かの Daily Strength〔日々の力〕と並びて英・独の日々のよき伴侶である。

真の基督者は謙遜である。深刻さがある。彼は傲慢、尊大な者に反抗するにはあまりに大なる力を有している。外観彼等に負けている様であるが、実は彼等を「まだまだ！」と云って笑っている。――一高遜者を見てかく思う。

今日は午後、斎藤さんの皆様と海へ行く。泳ぐ。濁流。また焼ける。増キタエラレル。生まれて胸にこれほど肉のついたことは初めてであろう。汝が泳ぐときの如くすべてにガンバレ。一時に一事を専心になせよ。夜9時より9時15分まで月夜に祈りて水の音も聞こえず。

働け、働け、しかして祈れ。この頃僕は、すこしのことがらから大なる真理を発見することの屢々（しばしば）あるを喜ぶ。そしてそれを断片的に日記に書き示して置く。内村先生の『所感十年』の様なものが出来そうである。

自分は思う。かかる深遠なる貴き精神を賜わりたる上は、如何で献身的勉励努力、以て誠正の基督教のために小さきあかしをせざるを得んや。人生のあらゆる境遇にありて、思念の上にも、言説の上にも、行為の上にも常に真誠の基督者たる事を示し、真誠の基督教に対して終始一貫変わることなく忠実であるべきである。Glück B.2,P.250 第1脚注、

「基督教はその在るがままなる具体的（in concreto）人間のための宗教である」

「理性宗教は実際は存在せざる抽象的（in abstracto）人間の為の宗教である」

――ザイラー

de facto〔事実上の〕6月27日 F.S.N.、9月17日 F.S.N.

「13世紀は総てが目覚ましい時代である。中世の精神を最もよく表現せるローマン・カトリック教会と神聖ローマ帝国とは最後の光を投げ、スコラ哲学はトマス・アクィナスによって完成せられ、数度の十字軍が起こされ、而も一面には聖フランチェスコが至純な福音を伝えて人間の霊と自然とを呪と伝統の殻から救い出している。」

「無限の悲愁と永久の勝利の自信とはダンテが生涯の特徴なり」

――ダンテとその時代より

Dante 1265～1321。

○1925年8月30日（日）

聖日。……〔独文省略〕……。

汝は真にかく言い得るや、悲しき哉、未だ全からざるなり。北京の兄上に倣いて潔く守れよ。お祈り（午後9時）の後より。

午後1時より2時まで午睡。よき気持になる。しかし暑い。2時半出る。途中、ビスケット1円、餅菓子50銭の買物をして駅に行く（餅菓子は東京に比べてすてきに安い）。これが僕の出し得るお見舞い。小田原着3時45分。佐藤六郎さんをお見舞したのである。彼、笑い顔にて出て来らる。相変わらず無頓着の野趣たっぷりである。餅菓子は多すぎた。明日になればわるくなる。水菓子の方がよかった。僕の祈りはまだ聴かれてなかった。六ちゃんはもとのままであった。

悔恨の情と悲観的言が多くあった。しかしそんなにメイッテ居るのではない。快活なところもうかがわれる。ただ病気にやや負けて居られる。言うことがすこしコントロールを失っている、とらわれている。これは長い病床に居てはやむを得ないかも知れない。彼は言われた、「身体がなおらなければ、精神がしっかりしない」と。かく言う人々は身体がなおっても精神はしっかりしないのである。しっかりしてもそれは一時的である。それは僕が断言し得る、体験である。

僕は失望もしなかった。恐らくしからんと思っていたから。しかし同情の涙がうかばんばかりであった。何故、僕の心を解して下さらないか、手紙のことはおわかりにならなかっ

たか。この経験がおそらく僕がこれからも外の人に対して持たなければならないものであろうと思わせられせた。

然り、この世の人に対しては失望である。ただ神に対してのみ希望である。かかるが故に僕は「水の上にパンをなげる」。それでよい。それで僕は正しい。それでこそ僕なんである。苦しい。僕の一つの十字架である。僕はこれに耐えない。しかしこの十字架が僕を耐えしめる。彼の愛によりて十字架の陰に立たんのみ。

夜、静かに読書せんとすれば、小さい人々が銭（コイン）マワシをしようと云って抱きつく。彼等を喜ばすのも楽しいことと思ってやる。1時間半ほど、8人で（女中2人も共に）。月がよい。羊羹とサフレーのお土産を小さい人々にあげた。僕はこの夏の記念にトランプ人を買った。箱根細工20銭。

僕の心。

汝、過去を見るなかれ。Christian〔基督者〕は前進するものなり。汝の身体に対する、学問に対する、残念なりしことも多からん。然れども、之皆贖われてあまりあり。行け！　進み行け！　前途は洋々たり！　確乎たる信仰の許に。確乎たる決心と忍耐と断行力とを以て前途を貫けよ！　道はこれのみ！　光見ゆ！

神様に抱かれることしっかりと、
身体は忍耐強く、黒く、丈夫に。
この夏の感謝は限りない。
政美兄上は月日と共に近し、
僕は彼の跡に残されてより茲（ここ）に4年、
神様の聖旨はいと貴くはかりがたし。
僕は速く召されるか遅く召されれるか、それは知らぬ。
しかしその時の如何は既に問題でなくなった。
いつ、いずこにても聖旨のまにまに。
然れども僕は僕の使命の終るまでは、
お父様なる神様は、徒（いたずら）にし給わないことを信ず。
僕の使命は重大である、尋常なものでない。
この世のことでない、聖国のためにである。
職業はいかにもあれ、使命は重大である。
ことは人の霊に関す、生命に関す。
人は嫌う、或るは迫害す、或るは侮辱す。
或るは知らず、或るは怒る。
然れども僕は人によって動かない。
彼等のために祈り、彼等のために福音を伝え、

彼等のために苦しみ、彼等のために歓ばんとするは
之、僕の使命であるのである。これを措いて僕はない。
然れども元、之、神のため、キリストのためにして
人のために非ず、聖国のためなり。
主イエス・キリスト復活し給えり。今在まし給う。
彼の十字架の愛と、この力とありてのみ僕は生く。
これによりて僕に能わざることなし。
十字架を仰ぎて十字架を負う、
ここに無限の歓喜と平安とあるを知らずや。
この世の苦しみは苦しみにあらず、この世の歓びは之僕の苦しみ。
ああ、僕は小、神は絶大。
神に依るは之、生命、歓喜。
この世にありては、十字架の道、祈りと感謝と讃美の日。
聖国に至りては、生命と歓喜に溢れん。
されば我が神よ、我が父よ、願わくは
日々を愛と忠実とを以て送らしめ給え。
日々を信仰と信頼によりて、絶大なる力の聖手に抱かしめ給え。
アーメン。

233〔285〕番　1主よ御手もて　ひかせたまえ
ただ我が主の　途を歩まん
いかにくらく　けわしくとも
聖旨ならば　われいとわじ
4この世を主に　ささげまつり
神の国と　なすためには
せめもはじも　死もほろびも
なにかはあらん　主にまかせて。

貴き救主、イエス・キリストの御名により聞きあげ給え。アーメン。　夜10時。

○1925年8月31日（月）

天長節。来月5日までに帰ることとした。6日から10日までは色々準備がある。愈々、8月も去る。長き夏休み、片瀬の夏とこの夏とは特別に印象にのこるであろう。日記も第7巻が終る。9月、10月、11月、12月、今年もあと4か月である。3分の2がすぎた。残る3分の1、4か月、120日は更に多忙である。

小学校、中学校、高等学校の学生生活の最終が来た。最終を美しく済さねばならぬ。終

りが大切である。この難所を絶倫の神の御力によって切り抜けるのである。然り、神によりてのみこれをなし得る。政美兄上のあの絶倫はどこからその源泉をひきだしたか。それは人の力にあらず、神の力であった。然るが故に、あの様に毎日々々が充実して居た。怠惰な日は一日も見出されなかった。

僕は兄に及ばざること遠しであるが、近づきつつあることも確かである。近代的Nervosität od. Neurasthenie〔神経質又は神経衰弱症〕は去れ。健全なる精神と健全なる身体と。Mens sana in corpore sano.〔健全な精神は健全な身体に宿る〕を体験するときの近からんことを。

随分勝利なことを云う。ゆるしてくれ。かかる人になりたい。それでなければ出来ないと云うのではないけれども、勿論 Seele〔魂〕が根本であとはどうでもよいけれども、健康体があたえられてくるから有難いのである。読書、勉強、別にあわてたり、心配したりする必要はない。sicher〔確実な〕に regelmäßig〔規則的な〕にやって行けば Keine Sorgen und es ist recht.〔心配なく且つ正しい〕である。

斎藤さんはお芋がすき、この頃はひるねは日課の一つ、能率増進である。午後、水泳、荒波、唯一人で泳ぐ。人驚異の眼を以て見る。かまわぬ。虚栄でない。腕だめしに泳ぐ。おそろしい。あまり長くは入っていない。石を巻く波で危ない。2回一寸入ってやめた。しかし、緊張していただけによい運動であった。夕食は美味しい。夜が来た。月が十二日位である。小田原の灯火をながめて六ちゃんのためにみじかき祈り。町を這って貧しき人々の生活を瞥見（べっけん）して思う。僕は物質的にたしかに豊かである。こうして学校に居られる自分を考えて見るがよい。これでなまけて居ては最大罪人である。彼等が苦しき労働をなす如く私は勉強せざるべからず。しかして、己が責を果たすべきである。そこに貴き使命を有するを忘れてはならぬ。

横須賀の夏　〔小1、1910年〕
田沢の夏　〔小2、1911年〕
田沢の夏　〔小3、1912年〕
田沢の夏　〔小4、1913年〕
安代（あんだい）の夏　〔小5、1914年〕
伊東の夏　〔小6、1915年〕
青根遠刈田（とおがった）の夏　〔中1、1916年〕
片瀬の夏　〔中2、1917年、政美兄上と共に〕
水泳部（富浦）の夏3回〔中3～中5、1918～1920年〕
追分の夏　〔高1、1922年〕
沓掛（くつかけ）の夏　〔再高1、1923年〕
赤倉の夏　〔高2、1924年〕

沼津国府津の夏　〔高3、１９２５年〕

これが小学校から高校の3年までの夏の経過。

おお、汝、男性的なる国府津の海よ、汝は我がこの感謝の夏の終りにあたって僕を強くしてくれた。有難う。この身体を以て秋は善き戦を戦わん！